

『華嚴經』と教育（二）

古田 榮作

要 旨

「方廣佛華嚴經」の「入法界品」は善財童子の求道の旅を描き、さまざまな善智識と出会うことによって彼の信仰の深まり、即ち修行者としての成熟を位置づけるものである。佛道を窮めようと発心した善財童子は、文殊師利菩薩と出会い、その素質と性向の良さから、この童子は普賢行を修めるべき人物とされ、善智識を訪ねて普賢行を達成するよう勧められる。最初に文殊師利菩薩から功德雲比丘に教えを受けるよう勧告されて彼を訪ねる。功德雲比丘から善財は「普門光明觀察正念諸佛三昧」についての教えを受け、「憶念諸佛」を学び、功德雲比丘は修行を達成するためには、海雲比丘を訪ねるよう勧められ、海雲比丘を訪ね、海雲比丘に「普眼經」を学び、思念すること、事物のありのままの状態を捉えることを学び、更なる修行のために善住比丘を訪ねるよう勧められる。そこで善財は善住比丘を訪ね、「無礙法門」を教えられ、一層の修行のために良醫彌伽への法門を勧告される。良醫彌伽を訪ねた善財は彼から「菩薩所言不虛法門」を教えられ、更に信仰を深めるために解脱長者を訪ねるよう勧められ、彼を訪ね、「如來如來無礙法門」を教えられることになる。善財の修行は十地の第一段階の「信」にあるが、善智識の教えの中で「認識」の深まりがあり、信仰がより深化されていくことが明確になっていく。

キーワード…善財童子 善知識 求道の旅 文殊師利菩薩 文殊師利菩薩 功德雲比丘（徳雲比丘 吉祥雲比丘） 海雲比丘 善住比丘
（妙住比丘） 良醫彌伽（彌伽 彌伽大士） 解脱長者

『華嚴經』は如來 (tathā-āgata) の縁起を明かす「世間淨眼品」(八十華嚴では「世主妙嚴品」。本稿では六十華嚴を主として用いる) から「離世間品」(八十華嚴でも同名) まどと如去 (tathā-gata) の縁起を明かす「入法界品」(八十華嚴でも同名。四十華嚴では「入不思議解脫境界普賢行願品」)。但し四十華嚴はこの「入不思議解脫境界普賢行願品」だけで構成されている⁽¹⁾ の二部で構成されている。第一部の総括的部分として描かれているのが「離世間品」である。「離世間品」は冒頭に

爾時世尊。在摩竭提國寂滅道場普光法堂。坐蓮華藏寶師子座。成等正覺。……⁽²⁾

と摩竭提國寂滅道場の普光法堂に在る正覺を得たばかりの世尊と雲集した普賢菩薩・普正法菩薩・普化菩薩・普慧菩薩・普眼菩薩・普光菩薩・普觀察菩薩・普照菩薩・普幢菩薩・普覺菩薩などの無数の菩薩が登場させる。正覺を得たばかりの世尊は黙然として語らず、「爾時普賢菩薩正受三昧。其三昧名佛華嚴。入三昧已。」⁽³⁾ と「佛華嚴」三昧に入り起った普賢菩薩が「爾時普慧菩薩。知諸菩薩大衆雲集。問普賢菩薩言。佛子。何等爲諸菩薩摩訶薩依果。何等爲奇特想。何等爲行。何等爲善知識。……」⁽⁴⁾ と雲集した菩薩たちを代表しての普慧菩薩の問に対応して「佛子。對して答えるという形で進行していく。普慧菩薩の問は二百項目に及ぶものであるが、その間に普賢菩薩は普慧菩薩の問に対応して「佛子。菩薩摩訶薩。有十種依果。何等爲十。所謂菩提心依果。究竟不忘失故。善知識依果。隨順和合故。善根依果。長養諸善根故。諸波羅蜜依果。究竟修行故。一切法依果。永出生死故。諸願依果。長養菩提故。諸行依果。廣修習故。菩薩依果。一生補處故。供養佛依果。信心不壞故。一切如來依果。正教離顛倒故。佛子。是爲菩薩摩訶薩十種依果。若菩薩摩訶薩。住此依果。則得如來無上智依果。佛子。菩薩摩訶薩。有十種奇特想。何等爲十。所謂於一切善根生自善根想。於一切善根生菩提種子想。於一切衆生生菩提器想。於一切願生自願想。於一切法生出生死想。於一切行生自行想。於一切法生佛法想。於一切語言生語言道想。於一切佛生慈父想。於一切如來生無二想。佛子。是爲菩薩摩訶薩十種奇特想。若菩薩摩訶薩。安住此想。則得無上巧妙方便轉一切想。佛子。菩薩摩訶薩。有十種行。何等爲十。所謂令一切衆生專求正法行。善根淳熟行。善學一切戒行。長養一切善根行。一心不亂修三昧行。分別一切諸智慧行。修習一切所修行。莊嚴一切世界行。恭敬供養善知識行。恭敬供養諸如來行。佛子。是爲菩薩摩訶薩十種行。若菩薩摩訶薩。安住此行。則得如來無上大智行。佛子。菩薩摩訶薩。有十種善知識。何等爲十。所謂能令安住菩提心善知識。能令修習善根善知識。能令究竟諸波羅蜜善知識。能令分別解說一切法善知識。能令安住成熟一切衆生善知識。能令具足辯才隨問能答善知識。能令不著一切生死善知識。能令於一切劫行菩薩行心無厭倦善知識。能令安住普賢行善知識。能令

深入一切佛智善知識。佛子。是爲菩薩摩訶薩十種善知識。……⁽⁵⁾と各項目に対して十項目の事項をあげるといふ形態で回答を示している。その最初に「因縁に依つて諸行を成ずること」とされる依果、「勝想に依り善根を摂する」とされる奇特想を取り上げた上で、その「勝想の解に基づいて大行を起こす」行を明らかにし、それが満たされれば如來の無上の大智行を成し得るとし、次いで善知識、すなわち菩薩道を究めるための善師もしくは善友について言及する。普賢菩薩の説く善知識とは「所謂能令安住菩提心善知識。能令修習善根善知識。能令究竟諸波羅蜜善知識。能令分別解說一切法善知識。能令安住成熟一切衆生善知識。能令具足辯才隨問能答善知識。能令不著一切生死善知識。能令於一切劫行菩薩行心無厭倦善知識。能令安住普賢行善知識。能令深入一切佛智善知識。佛子。是爲菩薩摩訶薩十種善知識。」⁽⁶⁾（「離世間品」）である。第一に能く菩提心に安住させる善知識、次に能く善根を修習させる善知識、三番目に能く諸々の波羅蜜を究竟させる善知識、四つ目に能く一切法を分別し解説させる善知識、五番目に能く一切衆生を（菩提心に）安住し成就させる善知識、六つ目に能く辯才を具足し、問いに随つて能く答えさせる善知識、七番目に能く一切の生死に執着させない善知識、八つ目に能く一切劫に於て（「長期間に亘つて」）菩薩行を行ない、心に厭倦を生ぜさせない善知識、九番目に能く普賢の行に安住させる善知識、最後に能く深く一切の佛智に入らせる善知識を掲げる。このように賢者・指導者たる善知識は、他者を菩提心（「さとりを得ようとする心」）を保持させ、善根を修習させ、諸々の波羅蜜（悟りに到るための菩薩の修行）を徹底的に体得させ、一切法を開示し解説させ、すべての衆生にさとりの道を究めさせようと発心させ、優れた弁才で、質問に答えさせ、執着せず、長期間に亘つて厭うことなくまた倦むことなく菩薩行を行なわせ、普賢菩薩の実践に安住させ、一切の佛智に入らせる指導者と描かれている。普賢菩薩は二百項目の善慧菩薩の問いに対してそれぞれ十箇条の回答を与えて演説を終える。⁽⁷⁾

文殊師利菩薩は「入法界品」の冒頭に

爾時佛在舍衛城祇樹給孤獨園。大莊嚴重閣講堂。興五百菩薩摩訶薩俱。普賢菩薩。文殊師利菩薩。而爲上首。夜光幢菩薩。須彌山幢菩薩。……如是等五百菩薩。此諸菩薩皆悉出生普賢之行。……⁽⁸⁾

と普賢菩薩とともに舍衛城の祇樹給孤獨園の大莊嚴重閣講堂に会集した五百菩薩の上首とされ、菩薩たちのすべてが普賢行を修行しているとされているのである。「如來名號品」で

爾時世尊。知諸菩薩心之所念。即如其像現神通力。現神力已。東方過十佛刹微塵數國。有世界名金色。佛號不動智。有菩薩字文殊師利。與十佛土塵數菩薩。來詣佛所恭敬供養頭面禮足。即於東方。化作蓮華藏師子之座。結跏趺坐。……⁽⁹⁾

として登場するが、「入法界品」では偈頌をもって祇洹林の莊嚴を讚歎し、さらに祇洹林に会集した一切の菩薩が如來の三昧に照らされて大悲の法門を得、衆生を饒益するとために修行し、十方に遊行し衆生を教化するために赴いた。ある者は天宮に、ある者は梵宮に、またある者は人宮に、ある者は閻羅王宮に往き、ある者は地獄や餓鬼畜生の住居に現れた。ある者は名號によって、ある者は憶念により、またある者は音聲により、また別の者は圓滿なる光明によって、更には光明の網によって、すなわちその状況に応じてそれにふさわしい手段で教化を行つた。衆生を教化するために十方に遊行し、聲聞の姿をとったり、梵天の姿を取ったり、苦行者の姿を装ったり、良醫の姿をしたり、商工業者の姿で、または正しい生活者の姿で、伎人の姿で、天界を示したり、一切の技術を發揮することで、すべての城邑聚落京都に、こゝとば、威儀、菩薩行、巧術、知識により世間に燈をとすことにより普く衆生を照らし、衆生を化度したと描かれており(この記述は善財童子が求道の旅の途上で出会う善智識が種々の職業に携わり、いろいろな地域のものであり、かつその種族・階層も種々であることと無縁ではない)、その上で

爾時文殊師利童子。從善安住樓閣出。與一切同行諸菩薩俱。金剛力士常隨侍衛。本願足天。樂聞法地天。……於生死海救濟衆生迦樓羅王。正求薩婆若阿脩羅王。見佛歡喜無厭足摩睺羅伽王。常厭生死諸天王。常敬禮佛諸梵天王等。俱詣佛所頭面禮足。設諸供養已。辭遊南方。⁽¹⁰⁾

と、文殊師利童子が善安住樓閣より同行の菩薩と共に出てきて、佛の所に詣で、供養した後南方に向かった。それを見た舍利弗は爾時尊者。舍利弗承佛神力。見文殊師利童子。以菩薩莊嚴而自莊嚴。出祇洹林遊行南方。見已作是念。我今當與文殊師利菩薩俱行。

爾時尊者舍利弗。與六千比丘眷屬圍遶。從自房出來詣佛所禮足辭退。向文殊師利。此六千比丘。是舍利弗共行弟子。皆新出家。⁽¹¹⁾

と「我今當與文殊師利菩薩俱行。」と文殊師利菩薩との同行の意志を明らかにする。聲聞の中で「智慧の舍利弗」と稱せられる舍利弗が自房を離れ、文殊師利菩薩と同行することは聲聞の説く小涅槃を捨て、一乘道、即ち大乘の道へと歩を進めることを意味する。更に

爾時尊者舍利弗。觀察大衆。告海智比丘言。汝可觀察文殊師利菩薩清淨之身。相好莊嚴。一切天人莫能思議。光明圓滿。令無量衆生

發歡喜心。放大莊嚴妙光明網。除滅衆生無量苦惱。觀其眷屬成就善根。觀其遊步威儀庠序。所遊行處自然平正十方無礙。觀其功德所行道。其傍悉有衆妙寶藏。自然發出。觀其供養過去諸佛善根依果。從衆林樹出莊嚴藏。觀彼一切諸天大王恭敬禮拜供養雲雨。海智。汝觀文殊師利。一切如來眉間毫相。放無量光。說諸佛法。悉入其頂。爾時尊者舍利弗。爲諸比丘。讚說文殊師利無量功德諸大莊嚴。彼諸比丘。聞讚大莊嚴。彼諸比丘。聞讚歎已皆歡喜。其心清淨離諸垢穢。身體柔軟調伏諸根。遠離障礙現礙現見諸佛。正求菩提。速得菩薩清淨諸根。具菩薩力長養大悲。入諸波羅蜜發弘誓願。悉見十方諸如來海。時諸比丘。白尊者舍利弗言唯然大師。願俱往詣文殊師利。爾時尊者舍利弗。與諸比丘往詣其所。到已謂文殊師利。此諸比丘。皆新出家。欲見仁者⁽¹²⁾。

と同席する大衆の代表たる海智比丘に向かつて「文殊師利菩薩の清淨なる身が、相好にして莊嚴なるを、天人さえも思量しがたいほどその放つ光明がゆきわたり、衆生に歡喜の心を起こさせ、苦惱を除滅し、眷屬が善根を成就し、その遊歩した處は自然と平らになり、彼の通つた道の傍に功德の依果が満ちているのを観るべきである。……」と如來に比せられるほどの文殊師利菩薩の姿を褒め称えた上で、自ら文殊師利菩薩を尋ね、文殊の求道法を学ぶために比丘とともに文殊に入門しようとする。

尊者舍利弗とともに同行してきた比丘たちに対して文殊師利菩薩は

爾時文殊師利。告諸比丘。汝等當知。若善男子善女人。成就十種大心。則得佛地。況菩薩地。何等爲十。所謂發廣大心。長養一切善根。究竟不退。心無厭足。見一切佛。恭敬供養。心無厭足。正求一切佛法。心無厭足。遍行菩薩諸波羅蜜。心無厭足。具足一切菩薩三昧。心無厭足。於一切三世流轉。心無厭足。嚴淨佛刹。充滿十方。心無厭足。教化成熟一切衆生。心無厭足。於一切刹。一切劫中。行菩薩行。心無厭足。發廣大心。修習一切佛刹微塵等諸波羅蜜。度脫一切衆生。具佛十力。心無厭足。若善男子善女人。成就如是十種大法。則能長養一切善根。離生死趣一切世間性。超出聲聞緣覺之地。生如來家。具足成就菩薩大願。行菩薩行住菩薩地。成就如來功德之力。降伏衆魔制諸外道。彼諸比丘聞此法已。皆得無礙淨眼三昧。悉見十方一切如來。及其眷屬無量衆生。亦見種種世界形類。衆寶宮殿。及諸微塵。乃至如來。十眼境界。皆悉覩見。彼諸如來以種種句身味身。種種辯才。微妙音聲。所說法海。皆悉聞知。彼世界中一切衆生。心念諸根。皆悉了知。知彼衆生過去未來諸趣能受生。又能知彼過去未來各十劫事。知彼如來十種本生。十種成就菩提自在。十種轉法輪。十種神力。十種教誡。十種說法。十種辯才。得此三昧時。具足成就十種實際菩提之心。一萬三昧。一萬淨波羅蜜。得大智慧圓滿光明。

菩薩十明住菩提心。爾時文殊師利菩薩。勸諸比丘。修普賢行住普賢行。彼諸比丘出生大願海。生大願海已。身心清淨。得不死通明。得是明已。不離此處。出生一切如來法身。充滿十方。具足一切佛法。爾時文殊師利菩薩。建立彼諸比丘菩提心已。與其眷屬漸遊南方。至覺城東。住莊嚴幢娑羅林中大塔廟處。¹³⁾

と十種の大心を成就するならば、菩薩地のみならず佛地を得て、能く一切の善根を長養して生死の趣と一切の世間性とを離れ、聲聞緣覺の地を超出し、如來の家に生まれ菩薩の大願を具足成就し菩薩の行を行い菩薩の地に住し如來功德の力を成就するならば衆魔を降服し諸外道を制すると説いた。この説法を聞いた比丘たちは皆無礙淨眼三昧を得て悉く十方の一切如來とその眷屬と無量衆生とを見、また種々の世界の形類と、衆寶の宮殿と諸々の微塵とを見、乃至如來の十眼の境界をも皆悉く覩見し、……大智慧の圓滿なる光明と菩薩の十明を得て菩提心に住むことになった。文殊師利菩薩は同座する諸々の比丘に普賢の行の修行を勸告し、さらに比丘たちに菩提心を植え付けて、その眷屬とともに覺城の東の莊嚴幢娑羅林の中の大塔廟の處に住まわれた。

ここで「十種の大心」とは「①發廣大心。長養一切善根。究竟不退。心無厭足。②見一切佛。恭敬供養。心無厭足。③正求一切佛法。心無厭足。④遍行菩薩諸波羅蜜。必無厭足。⑤具足一切菩薩三昧。心無厭足。⑥於一切三世流轉。心無厭足。⑦嚴淨佛刹。充滿十方。心無厭足。⑧教化成熟一切衆生。心無厭足。⑨於一切刹。一切劫中。行菩薩行。心無厭足。⑩發廣大心。修習一切佛刹微塵等諸波羅蜜。度脱一切衆生。具佛十力。心無厭足。」のことであり、すなわち厭くことなく①廣大なる心を發し一切の善根を長養し、退くことなく、②一切の佛を見、恭敬し供養し、③正しく一切の佛法を求め、④遍く菩薩の諸波羅蜜を行じ、⑤一切の菩薩の三昧を具足し、⑥一切三世の流轉に於て、⑦佛刹を嚴淨し、十方に充滿させ、⑧一切の衆生を教化し成就し、⑨一切の刹に於て一切劫の中に菩薩の行を行じ、⑩廣大なる心を發して一切の佛刹微塵に等しい諸波羅蜜を修習し、一切の衆生を度脱して佛の十力を具えしめるものである。つまりは善根の長養と不退の決心、佛の供養、正求佛法、菩薩の諸波羅蜜の實踐、菩薩の三昧の具足、佛刹の嚴淨、衆生の教化成熟、時空を限らない菩薩行の實踐、諸諸波羅蜜の修習による衆生の度脱であり、善根の長養という道德心の涵養に始まり、諸諸波羅蜜の修習による衆生の度脱に至るといふ大乘の立場の主張に他ならないが、そのことによって比丘に菩提心を建立することになったのである。

時覺城人。聞文殊師利在莊嚴幢娑羅林中大塔廟處。聞已。優婆塞。優婆夷。童男童女。皆悉往詣文殊師利。……復有五百童子。其名

曰善財童子。善行童子。善戒童子。善威儀童子。善精進童子。善心童子。善慧童子。善覺童子。善眼童子。善臂童子。善光勝童子。如是等五百童子俱。頭面禮足退坐一面。⁽¹⁴⁾

文殊師利を尋ねていった優婆塞・優婆夷・童男童女の中に善財童子も含まれていた。その善財童子はいかなる人物として描かれているのだろうか。

(文殊師利菩薩) 觀察善財童子。以何因緣名曰善財。此童子者。初受胎時。於其宅內有七大寶藏。其藏普出七寶樓閣。自然周備。金銀瑠璃玻瓈眞珠硨磲碼瑙。從此七寶生七種芽。時此童子處胎十月。出生端正肢體具足。其七種寶芽。高二尋廣七尋。又其家內自然具有五百寶器。盛滿衆寶。金器盛銀。銀器盛金。金剛器盛衆香。衆香器盛寶衣。玉石器盛上味饌。摩尼器盛雜寶。種種寶器盛酥油蜜。及以醍醐資生之具。瑠璃器盛衆寶。玻瓈器盛硨磲。硨磲器盛玻瓈。碼瑙器盛赤珠。赤珠器盛碼瑙。火珠器盛淨水珠。淨水珠器盛火珠。如是等五百寶器。自然行列。又雨衆寶。滿諸庫藏。以此事故。婆羅門中善明相師。字曰善財。此童子者。已曾供養過去諸佛。深種善根。常樂清淨。近善知識。身口意淨。修菩薩道。求一切智。修諸佛法。心淨如空。具菩薩行。爾時文殊師利菩薩。如象王廻。觀察善財。而告之曰。吾當爲汝說微妙法。⁽¹⁵⁾

と善財童子にまつわる二つの瑞兆を挙げている。すなわち、一つは善財童子が母親の胎内に宿った時にその家宅には七大寶藏が出現し、その藏は七寶を藏する樓閣が生まれ、自然に周囲に七寶である金銀瑠璃玻瓈眞珠硨磲碼瑙が備わっており、この七寶から七種の芽が生じたという瑞兆。他は月満ちて童子が誕生した際には、端正な肢体を具えており、その七種の寶の芽は高さ二尋幅七尋の大きさになり、その家宅には多くの寶で満たされた五百もの寶器が自然に具わり、金の器には銀が、銀の器には金が、ダイヤモンドの器にはさまざまな香料が、香料のつけられた器には寶の衣装が、……と盛られていた。このように五百もの寶の器が自然に列をなしており、数多の寶が雨の如く降り注ぎ、諸々の倉庫と藏を満たしていたというもの。この二つの瑞兆の故にバラモンの勝れた明相師(人相占い師)は善財と名づけた。この童子は既に過去の諸佛を供養し、深く善根を種(う)え、常に清淨を樂(ねが)い、善知識に近づき、身口意すべてが淨く、菩薩の道を修し、一切智を求め、諸佛法を修し、心の淨きこと空のごとくにして菩薩の行を具えていた。その時文殊師利菩薩は、象王の廻るが如くしげしげと善財を觀察して、彼に告げて曰く。「吾當に汝がために微妙の法を説くべし。」と。

二つの瑞兆は資質（すなわち素質）としての善財の異質性と修行（すなわち教育・学習）の成果としての無類性を暗示するものである。こうした無比の資質と修行の経歴の故に、文殊師利は善財童子に向かつて微妙の法の説法を始めるのである。文殊師利の微妙の法の説法は即爲分別諸佛正法。分別諸佛次興世法。淨眷屬法。轉梵輪法。諸佛色身。相好清淨莊嚴之法。一切諸佛具法身法。諸佛音聲妙莊嚴法。說一切如來平等正法。⁽¹⁶⁾

と諸佛の正法を分別し、諸佛に次で世に興る法、淨き眷屬の法、轉梵輪の法（佛陀の説法）、諸佛の色身相好清淨莊嚴の法、一切諸佛の法身を具する法、諸佛の音聲妙莊嚴の法を分別し、一切の如來の平等の正法を説くのである。そして

爾時文殊師利。知善財等一切大衆聞説此法。皆大歡喜發菩提心。顯明過去諸善根已。不捨本座。如應化度覺城衆生已。遊行南方。⁽¹⁷⁾

文殊師利のこの説法はその座の一同を歡喜させ、彼らの菩提心を發揮させることとなり、彼らを教導した上で南へと向かった。善財童子は以下の偈頌で菩提を求めて文殊師利の教えに隨從することを決意する。

爾時善財童子從文殊師利。聞佛如是諸妙功德。專求菩提。隨從文殊師利。以偈頌曰

三有爲城郭	高慢爲園牆	諸趣爲却敵	染愛爲深壘	愚癡闇覆蔽	三毒常熾然	惡魔爲君主	童蒙依止住
貪愛所纏縛	詭曲壞正行	疑惑障慧眼	流轉諸邪道	慳嫉所繫縛	趣向餓鬼難	生老病死逼	愚癡轉趣輪
圓滿無上悲	清淨智慧日	消渴煩惱海	願願少觀察	圓滿無上慈	慧光安衆生	一切無不曜	月王願照我
一切法界王	淨法爲四兵	常轉正法輪	願化我妙法	具足菩提願	積集功德藏	饒益一切衆	大師願度我
忍鎧莊嚴身	執持智慧劍	於魔嶮惡道	濟我免衆難	住法須彌頂	妙定天女侍	降伏阿脩羅	帝釋觀察我
具足離垢力	分別一切有	世間明淨燈	願示我正趣	遠離諸惡道	悉令善趣淨	開我解脫門	超出諸世難
著常樂我淨	迷惑於生死	清淨智慧眼	願開解脫門	遠離諸顛倒	無畏知正道	了達諸正趣	示現我菩提
安住正見地	諸佛功德樹	常雨正覺華	願示我菩提	世間明淨日	三世諸如來	如法而來去	願令我悉見
分別一切業	深知諸法性	決定智慧乘	示我摩訶衍	諸願輪成滿	大悲不可盡	淨妙德莊嚴	安我菩提乘
具足淨法界	大慈爲觀察	功德華莊嚴	賜我第一乘	安住梵行座	三昧女朝侍	微妙法音樂	示我法王道

無盡四攝藏	功德莊嚴智	光明照一切	願速示勝道	施惠圓滿光	栴檀戒塗身	忍辱大莊嚴	願速示正道
深入諸禪定	教化群生類	具足方便乘	安我勝法乘	諸願圓滿輪	永絕生死輪	具足持智力	安我妙法乘
一切悉殊妙	大悲觀衆生	究竟勝妙行	安我實智乘	安住金剛慧	究竟一切智	除滅諸障礙	安我賢聖乘
慈悲甚彌廣	安樂諸群生	法界等淨眼	安我無上乘	除滅衆苦陰	諸業煩惱輪	降伏一切魔	安我正法乘
智慧照十方	莊嚴諸法界	滿足衆生願	安我勝妙乘	心淨如虛空	除滅邪見愛	饒益一切衆	安我勝法乘
安住如風輪	普持一切刹	令衆住定地	安我殊勝乘	安住如大地	具足大悲力	智慧益衆生	安我最勝乘
四攝光圓滿	饒益群生類	總持清淨光	示我明淨日	開發淨慧眼	莊嚴妙智王	冠以無上冠	法王慈願我 ¹⁸⁾

善財童子の偈頌は、前半は修行の行き届かぬ善財童子の自己の迷没して出離することの出来ないことを嘆き、後半は文殊師利の九種の徳（悲智・慈悲・法化・願滿・救苦・自在・力用・普淨・淨明の徳）を稱え凡夫の苦を離れしめんことを望むものである。この偈頌はさとりへの道を進もうと考える善財童子と道を究めた文殊師利とを対比することによって文殊師利の徳を稱えるものである。これを承けて

爾時文殊師利。如象王廻。觀善財童子。作如是言。善哉善哉。善男子。乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。求善知識親近善知識。問菩薩行求菩薩道。善男子。是爲菩薩第一之藏。具一切智。所謂求善知識。親近恭敬而供養之。是故善男子應求善知識親近恭敬。一心供養而無厭足。問菩薩行。云何修習菩薩道。云何滿足菩薩行。云何清淨菩薩行。云何究竟菩薩行。云何出生菩薩行。云何正念菩薩道。云何緣於菩薩境界道。云何增廣菩薩道。云何菩薩具普賢行¹⁹⁾。

と描かれている。正覺を求めて菩提心を發し、善知識を求め、善知識に親近し、菩薩の行を問ひ、菩薩の道を求めよと文殊師利は善財童子に諭す。この文殊の言は善財童子に求道の旅へと誘うのである。

爾時文殊師利。爲善財童子以偈頌曰

善哉功德藏	能來詣我所	發廣大悲心	專求無上道	先發諸大願	除滅衆生苦	究竟菩薩行	成就無上道
若有諸菩薩	不厭生死苦	具足普賢行	一切莫能壞	功德光勝來	清淨功德海	正求普賢行	饒益一切衆
無量無有邊	世界諸佛所	聞說淨法雲	受持不忘失	悉於十方界	普見無量佛	成滿諸願海	具足菩薩行

究竟方便海　安住如來地　隨順諸佛教　逮得一切智　一切世界中　法王積劫行　具足普賢道　究竟佛菩提
一切刹劫海　修習菩薩行　滿足諸大願　成就普賢乘　無量諸衆生　聞彼名號者　修習普賢願　得成無上道⁽²⁰⁾

爾時文殊師利。說此偈已。告善財言。善男子。於此南方。有一國土。名曰可樂。其國有山。名曰和合。於彼山中。有一比丘。名功德雲。汝詣彼問。云何菩薩學菩薩行。修菩薩道。乃至云何具普賢行。善男子。彼比丘者。善能顯說菩薩所行。時善財童子。從文殊師利。聞法歡喜。頭面禮足。遶無數匝。瞻仰悲戀。泣涕辭退。⁽²¹⁾

文殊師利は「悉於十方界　普見無量佛　成滿諸願海　具足菩薩行　究竟方便海　安住如來地　隨順諸佛教　逮得一切智　一切世界中　法王積劫行　具足普賢道　究竟佛菩提　一切刹劫海　修習菩薩行　滿足諸大願　成就普賢乘　無量諸衆生　聞彼名號者　修習普賢願　得成無上道」と普賢の行、多く法を辯ずる行、多くの法を聞く行、多くの佛を見る行、教えに順じて修行する行、一切時の行、一切處の行、大益を成ずる行を行ずることを求めた上で、南方の可樂國の和合山中に住する功德雲なる比丘を詣ねて「云何菩薩學菩薩行。修菩薩道。乃至云何具普賢行。」と問うよう勧め、善財童子の旅が始まる。

漸漸南行。向可樂國。登和合山。於彼山中。十方周遍一心觀察。求覓太師爲在何所。如是尋求。乃至七日。爾時善財見彼比丘。乃在山頂靜思經行。見已馳詣。頭面禮足。右遶而住。白言大聖。我已發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何學菩薩行。修菩薩道。我聞大師善能宣暢。唯願垂慈。具足演說。⁽²²⁾

善財童子はまず可樂國に向かい和合山に登り、山中に住する功德雲なる比丘を尋ねること七日、ようやく山頂に靜思經行する功德雲という名の比丘を見出し、駆け寄って「我已發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何學菩薩行。修菩薩道。我聞大師善能宣暢。唯願垂慈。具足演說。」と白す。この要請に応えて、功德雲比丘は、

問菩薩行。善男子。如是事者。難中之難。所謂能問菩薩所行。修菩薩道。入菩薩境界。出生清淨菩薩之道。求於菩薩清淨廣心。具足諸願。隨順世間所應化者。於生死中求解脫門。有爲無爲心不染著。⁽²³⁾

と菩薩行を問うことを難中の難であることを示した上で、菩薩の所行を問うことに始まり「修菩薩道。入菩薩境界。出生清淨菩薩之道。求於菩薩清淨廣心。具足諸願。隨順世間所應化者。於生死中求解脫門。有爲無爲心不染著。」に至ることが菩薩行を問うことであると捉え、

更に

善男子。我於解脫力。逮得清淨方便慧眼。普照觀察一切世界。境界無礙。除一切障。一切佛化陀羅尼力。或見東方一佛二佛。……種種形色。種種自在遊戲神通。種種眷屬莊嚴放大光網。種種清淨莊嚴佛刹。隨受化者。示現自在菩提法門。見諸如來。於大眾中而師子吼⁽²⁴⁾と解脫の力により清淨なる方便の慧眼を獲得して世界を観察するのに何らの障害もなく、無數の佛を見ることができ、佛はいろいろな方角で多種多様な色や姿で現われ、様々な神変を現じ、多彩な光網を放出し、それぞれ清らかに飾られた佛刹において衆生の願いに応じて佛の世界を顯現させておられる。諸々の如來は大眾の中で獅子吼して説法されているのを見ることができるとしている。功德雲比丘が解脫力を得ることで「清淨方便慧眼」を普照觀察一切世界が可能になることを示している。その上で

我唯知此普門光明觀察正念諸佛三昧。豈能了知菩薩圓滿清淨智行。諸大菩薩得圓滿普照念佛三昧門。悉能親見一切諸見一切諸佛及其眷屬。嚴淨佛刹。得一切衆生遠離顛倒念佛三昧門。隨一切衆生所應悉令清淨⁽²⁵⁾。……

私はただこの普門光明觀察正念諸佛三昧を知っているだけであり、菩薩の圓滿なる清淨の智行を了知できたのではない。諸々の大菩薩は圓滿にして普く照らす念佛三昧門を得て悉く能く一切の諸佛とその眷屬と嚴淨なる佛刹とを親見し、一切衆生の顛倒を遠離する念佛三昧門を得て一切の衆生の、所應に随つて悉く正常ならしめる。……と大菩薩が念佛（つまりはひたすら佛を想念すること。いわゆる「稱名念佛」ではない）三昧によつて成し遂げられていることを明示する。普き光明により諸佛を観察し正念する三昧だけを知っている功德雲比丘は佛を観、正念する三昧ひいては佛を念ずることの重要性を説くのである。善財童子はここで佛と定を学び得たのであり初住である初發心住の位に入つたのである。これについて

爾時功德雲比丘告善財言。善男子。南方有國。名曰海門。彼有比丘。名曰海雲。汝應詣彼問菩薩行。善男子。彼比丘者。能分別說善根。具因善根。大地善根。大力善。能讚歎菩提因緣。廣摩訶衍。增廣波羅蜜力。顯現一切菩薩行海。善能清淨圓滿大願。能令出生清淨普門。莊嚴法門生大悲力。時善財童子。從功德雲比丘。聞法歡喜。頭面禮足遶無數匝。眷仰願戀辭退南行⁽²⁶⁾。

南方の海門という名の國に海雲という名の比丘が居られるので、彼に菩薩の行を尋ねなさい。その比丘は分別して善根を説き、具因の善根・大地の善根・大力の善を説き、能く菩提の因縁を讚歎し、摩訶衍を廣め、波羅蜜力を増廣し、一切の菩薩の行海を顯現し、善く大願を

清淨圓滿ならしめ、能く清淨なる普門の莊嚴法門を出生せしめ、大悲の力を生じさせるであらうとの功德雲比丘の言葉に誘なわれ、海雲比丘を訪ねる。功德雲比丘の言葉にある具因の善根は地前の善であり、菩薩の五十二位のうち、十信・十住・十行・十回向の四十位を指し、大地の善根は地上の善であり、菩薩の五十二位のうち、初地以上の位を指し、大力の善根は佛地の善であり、情・智に関するあらゆる障害（煩惱障・所知障）から解放された階位で、佛の位を指すとされる。この三つの善根を分別して説くことで、大乘の法を広め、悟りへの道を広くし、一切の菩薩の行海を顯現し、善く大願を清淨圓滿ならしめ、能く清淨なる普門の莊嚴法門を出生せしめ、大悲の力を生じさせるであらうと説く。この功德雲比丘の言葉は、多くの人々の苦しみを救おうとする佛の慈悲心を生むとするのである。

爾時善財童子。一心正念善知識教。智慧光明菩薩法門。菩薩三昧。觀察一切菩薩諸方便海。圓滿功德。心常樂見一切菩薩。念一切佛次第興世清淨功德。漸趣南方海門國土。詣海雲比丘。頭面禮足。右邊畢退住一面。白言大聖。我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。欲度一切智慧大海。而未知菩薩云何離生死性。得不退轉生如來家。度生死海逮得如來一切智海。捨凡夫地得如來地。斷生死流入菩薩流。滅諸趣輪滿諸願輪。降伏衆魔具佛功德。竭愛欲海長大悲海。閉諸惡道開天人路。諸解脫門。出三界城到一切智城。捨離一切玩好之具。發弘誓願攝取衆生。⁽²⁷⁾

善財童子は一心に善知識の教（すなわち功德雲比丘の教示）である智慧光明の菩薩の法門と菩薩三昧とを正念し、一切菩薩の諸々の方便海と圓滿なる功德とを觀察して心常に一切の菩薩を見んことを願ひ、一切佛の次第に世に興る清淨なる功德を念じ、漸く南方の海門國土に向ひ、海雲比丘を尋ね、頭面禮足して、『大聖よ、私は既に菩提心を發し、一切智慧の大海を渡らんとしたが、菩薩がどのようにして生死の性を離れ、不退轉を得て如來の家に生まれ、生死の海を度り如來の一切智海を逮得し、凡夫地を捨てて如來地を得、生死の流を斷ち、菩薩の流に入り、諸趣の輪を滅し諸願輪を滿じ、衆魔を降伏して佛の功德を具し、愛欲の海を竭して、大悲の海を長じ、諸々の惡道を閉じ、天人の路、諸々の解脫門を開き、三界の城を出て、一切智の城に到り、一切の玩好の具を捨離して弘誓の願を發して衆生を攝取するを未だ知らず』と白す。善財童子は菩薩の道を究めようと發心し一切智慧の大海を渡ろうと願ったが、未だ菩薩が生死の性をどのようにして離れるかを知らず、不退轉を如來の家に生まれ、生死の海を渡り……弘誓の願を發し衆生を攝取するまでには到っていないと告白したのである。

爾時海雲比丘。告善財言。善男子。汝已發阿耨多羅三藐三菩提心耶。答言唯然。善男子。若不深植善根。則不能發阿耨多羅三藐三菩

提心。得普門善根。普照光明法門。長養正道。三昧慧光。出生種種功德海藏。長白淨法。未曾退失。親近善知識。恭敬供養。不惜身命。無所藏積。離諸高慢。心安不動猶如大地。大慈愍念一切群生。遠離一切諸生死門。好樂佛境界者。能發菩提心。大悲心救護一切衆生故。大慈心安樂一切衆生故。……⁽²⁸⁾

海雲比丘は善財童子に『あなたは本当に阿耨多羅三藐三菩提心を發したのか』と問い、善財童子が『唯然』と答えると『深く善根を植えなければ阿耨多羅三藐三菩提心を發することはない。普門の善根と普照光明の法門とを得て、正道を長養し、三昧の慧光は種種功德の海藏を出生し、白淨の法を長じて、未だ曾て退失せず、善知識に親近して、恭敬し供養し、身命を惜しまず、藏積する所無く、諸々の高慢を離れ、心安くして動かざること猶大地の如く、大慈をもって一切の群生を愍念し、一切の諸々の生死の門を遠離し、好んで佛の境界を樂わん者は能く菩提心を發さん。大悲の心、一切の衆生を救護するが故に。大慈の心、一切の衆生を安樂にするが故に。……』すなわち海雲比丘の『汝已發阿耨多羅三藐三菩提心耶。』との念押しに対して善財童子の返答が『唯然』であることをふまえての『若不深植善根。則不能發阿耨多羅三藐三菩提心。』するのであり、

我住此海門國。十有二年。境界大海。觀察大海。思惟大海。無量無邊思惟大海。甚深難得源底思惟大海。漸漸深廣思惟大海。無量妙寶而莊嚴之。思惟大海無量水聚。思惟大海水色種種不可思議。思惟大海大身衆生之所依止。思惟大海水性所居。思惟大海大雲彌覆。思惟大海未曾增減。……即見海底水輪之際。妙寶蓮華自然湧出。⁽²⁹⁾

私は十二年間、海門國に住んで大海を觀察し、思惟し、その無量無邊なるを思惟し、それが甚だ深くて源底を極めつくすことが出来難く、その深廣なることを思惟し、それが無量の妙寶によって飾られていることを慮り、それが無量の水を集めていることを考え、その色は種々であり不可思議であることを考え、それが衆生の依止する所であることを思惟し、それが水性の所居であることを思惟し、それが大雲彌覆していることを考え、それが未だ曾て増減しないことを思惟してきた。……即ち海底水輪の際を見るに、妙寶蓮華は自然に湧出してきた。この一節は嵩山の少林寺で「面壁九年」の中國禪の初祖たる菩提達磨(Bodhidharma)を想い起させる。大海を觀察・思惟し、……その依果として「即見海底水輪之際。妙寶蓮華自然湧出。」を体得したのである。十二年に及ぶ觀察・思惟……が「妙寶蓮華自然湧出」を感じ取らせたのである。

見彼華上。有一如來。結跏趺坐。……時彼如來即申右手。而摩我頂。說普眼經。唯是如來境界。出生一切菩薩淨行。普照一切法界。攝取圓滿一切法界。普照一切嚴淨佛刹。降伏一切衆魔外道。悉令一切衆生歡喜。普照一切衆生所行。隨其所應無不顯現。普照一切衆生根輪。善男子。我從佛聞此普眼經。皆悉受持。讀誦通利。正念思惟。⁽³⁰⁾……

彼の華の上に一如來が居られて結跏趺坐したまえるのをみた。彼の如來は右手を差伸べて私の頭頂を摩でて普眼經をお説きになられた。それは如來だけの境界を示すもので、一切の菩薩の淨行を生み出し、普く一切の法界を照らし、圓滿なる一切の法界を攝取し、普く一切の嚴淨なる佛刹を照らし、一切の衆魔外道を降伏し、悉く一切の衆生を歡喜させ、普く一切の衆生の所行を照らし、その所應に随つて顯現しないものはなく、普く一切の衆生の根輪を照らす。善男子よ。私は佛に從つてこの普眼經を聞き、それを皆悉く受持し讀誦し通利し正念に思惟した。……

我唯知此一法門。豈能盡知菩薩諸行。⁽³¹⁾

海雲比丘は普眼經の説く法門を知っているのみであり、菩薩の諸行を知り尽しているのではないとした上で、

善男子。汝詣南方。六十由旬。有一國土名曰海岸。彼有比丘名曰善住。應往問彼。云何菩薩修清淨行。⁽³²⁾

と善財童子に南方六十由旬の海岸國に住む善住という名の比丘を詣でて「云何んが菩薩の清淨行を修するか」と問うべきであると告げる。善財童子はここで法と慧とを学び、第二の治地住に到る。功德雲比丘と海雲比丘とを訪問する記述を通して、「入法界品」の叙述法は、善知識の推挙する新しい善知識を探访するのであるが、その際に教えを受けた古い善知識の教示を内省・吟味しながら歩を進める。新たな善知識に菩薩行を学び方、菩薩道を修め方を尋ねる。新たに出会った善知識は自らの見解を示すが、最終的に「我唯知此……」として、より深い見識を得るために他の善知識を紹介する形をとっている。

海雲比丘の言に從つて善財童子は「正念善知識教。正念普眼經。思惟彼佛自在神力。受持彼佛句味法雲。修習正法入深法海。盡法源底攝取勝法。除滅癡瞋了法寶洲至海岸國。」⁽³³⁾と海雲比丘の教えを、普眼經を正念し、佛の自在神力を思惟し、佛の句味の法雲を受持し、正法を修習し、深法の海に入り、法の源底を盡して、勝法を攝取し、癡瞋を除滅して、法寶の洲を了つて海岸國にたどり着いた。

見彼比丘經行虛空。阿僧祇天眷屬圍遶。時諸天衆。爲供養善住比丘故。於虛空中散諸天華。作衆妓樂出微妙音。阿僧祇寶幢莊嚴虛空。

時諸龍王。爲供養故。興不可思議沈水香雲。遍滿虛空。緊那羅王。爲供養故作諸妓樂出微妙音聲。充滿虛空。諸海神王。爲供養故嘯和雅音。阿脩羅王。爲供養故。興不可思議寶雲。莊嚴虛空。放不可思議光明。普照一切。以不可思議珍玩之具。莊嚴虛空。不可思議緊那羅王。充滿虛空。離殺害心。恭敬供養善住比丘。……⁽³⁴⁾

善財童子は善住比丘が空中を数多の天人に取り囲まれながらそぞろ歩きしておられるのを見た。諸々の天人は、善住比丘を供養するために空中に天の華を散りばめ、衆の妓樂をさせ、その奏でる音は妙なるものであり、無数の寶幢が虚空を莊嚴し、時には諸々の龍王も供養のために不可思議な沈水香の雲を興して虚空を遍く滿たし、緊那羅王は供養のために微妙な音楽を奏で、数多の海神王は供養のために和雅なる音を嘯し、阿脩羅王は不可思議な寶雲を起こして虚空を飾り、不可思議な光明を放って普く一切を照らした。不可思議な珍玩なる具によつて虚空を莊嚴した。不可思議なのは緊那羅王さえもが、虚空を充滿し、殺害心を離れて善住比丘を供養したのである。……

爾時善財童子。見虚空中如是供養。合掌敬禮善住比丘。白言大聖。我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何正向佛法專求佛法。恭敬佛法修諸佛法。長養佛法積集佛法。熏修佛法淨諸佛法。遍淨佛法至諸佛法。我聞大聖善能教授諸菩薩法。云何菩薩修習佛法。常見諸佛未曾遠離。常見菩薩同其善根。不離佛法智慧滿足。不捨大願。於一切衆生究竟其事。於一切劫修菩薩行心無疲倦。不捨佛利。普能莊嚴一切世界。悉能知見諸佛自在。不離有爲修菩薩行。悉了如幻入一切趣。現受生死而無起滅。常聞正法未曾遠離。悉能受持諸佛法雲。不離慧光普照三世。⁽³⁵⁾

その時善財童子はこのように空中で供養されておられる善住比丘に合掌敬禮して『大聖よ。私は佛の道を究めようと發心しましたが、未だどのように佛法に正しく向かい、佛法を専ら求め、佛法を恭敬し諸々の佛法を修め、佛法を長養し、佛法を積集し、佛法を熏修し、諸々の佛法を淨め、遍く佛法を淨め諸々の佛法に至るかを知らない。あなたはよく諸々の菩薩の法を教授なさるとお聞きしました。菩薩はどのように佛法を修習し、常に佛を見、決して（佛から）遠離されず、常に菩薩を見てその善根を同じくし、佛法から離れず智慧を滿足し、一切の衆生がそのことを究めようとする事、一切劫において（どんなに短い時間でも）菩薩の行を修め心に倦まないという大願を捨てず、佛の世界を捨てず、よく一切世界を莊嚴して、悉く能く諸々の佛の自在を知見し、有爲を離れず菩薩の行を修め、悉く如幻なるを了りて一切趣に入り、生死を現じて起滅なく、常に正法を聞き、未だ曾って遠離せず、悉く諸佛の法雲を受持して、慧光を離れず普く三世を照らして

おられるか(をお教え下さい)。」と尋ねた。

ここで問われている、佛法への正向、専求、恭敬、修、長養、積集、熏修、遍淨、至を修習の内実として位置づけている。この正向、専求……はヘルバルト教育学における「専心」(Vertiefung)と「致思」(Besinnung)の概念を彷彿させる。篠原助市の説くところでは、

専心とは精神が一定の對象に沈潜する状態で、興味の多方は多様な専心から起る。次ぎに致思は個別的に意識に存する表象を結合する作用、言ひかへれば専心によつて得た表象を反省し統一する作用である。この二者は精神の呼吸作用とも稱すべく、多方は専心に統一は致思に基づき、専心あつて致思なくば人格は「放散」となり、致思が弱くて、且凡てを包括しないときは「一方的」となる。

「精神は常に運動する。しかしこの運動は息切れのした疾走であつてはならぬ。活動と静止とが交代しなければならぬ」(ブレーメンの講演「道德と宗教に就いて」一八〇〇年)。即ち精神は常に動きつゝも、其の速な状態と、殆んど動かない状態とが區別せられる。かくてヘルバルトは専心と致思に各々動的と静的とを配して教育的教授の順序を次ぎの如く定めた。

- 一 静止的専心 個々の對象を明瞭に認知するⅡ明瞭
- 二 進行的専心 一の専心から他の専心に移る。この場合、想像と聯想が作用するⅡ聯合
- 三 静止的致思 聯的致思 聯合せられた表象相互の關係を考へ、各々に適當な位置を與へ、正しい秩序に於て統一するⅡ系統
- 四 進行的致思 系統によつて得られたものを應用するⅡ方法

以上の四段階が教材の最も小なる区分にまで適用せられ、従つて如何なる教材に於ても専心と致思とが同一の權利を保有することは教授上守らるべき一つの原則であつて、この原則に合したものを教授の「純潔」"Sauberkeit"と呼ぶ。次ぎに「純潔」となった教材が夫れ自身再び高次の専心の對象となり、再び高次の致思によつて結合せられ、かくて順次に上昇しつゝ、結局、一切を包括する最高の致思(最高の系統)に達するのは教授の理想であり、こゝに教授の「調節」"Artikulation"は成る。夫れは固より容易に實現せらるべくもない理想であるが、大凡教授に際しては、より包括的な専心と致思により、一步一步之に近づくやうに工夫が凝らされねばならぬ。⁽³⁶⁾

とされるのである。換言すれば、認識過程を明示するために、専心と致思の概念を用いるのであり、専心とは、精神が一つの對象に集中す

る作用であり、他方致思とは、専心によって獲得した諸表象を統一・体系化する作用として位置づけられるものであるが、ここでは対象である佛法に正しく向かい合い、それを専ら求め、それを恭敬し、修め、長養し、それを積み重ね、折りに触れて身に行い、遍く浄め、その言行が佛法にかなうものに至ることを佛法の修習とみなしているのであり、すなわち対象と向かい合い、専ら求め、それを優れたものとして敬い、学習し、佛道修行を長く助けるものと捉え、諸々の佛法を積み集め、香の匂いが衣服に染込むように習慣によって佛法の教えが身につき、佛法によって遍く言行を浄め、言行が佛法に適合するようにまで至ると見做しているのであって、そうした行動指針として佛法を捉えようとしている。このように捉えた後、菩薩が如何にして佛法を修習し、佛を見、佛から遠離されないでられるかを、また菩薩の境地に達していない者は常に菩薩を見、菩薩と善を為そうとする心構えを持ち、一切劫において菩薩の行を修めようとする心持ちに疲倦を生じないという大願を捨てず、佛の世界を捨てないで、一切世界を莊嚴して、悉く能く諸々の佛の自在を知見し、有爲を離れず菩薩の行を修め、一切世界が、悉く如幻なるを了りて一切趣に入り、生死を現じて起滅なく、常に正法を聞き、未だ曾って遠離せず、悉く諸佛の法雲を受持して、慧光を離れず普く三世を照らしておられるか（をお教え下さい）」と質問するのである。すなわち、正しく認識し、その認識に基づいて行動するとの過程をより詳細に捉えようとしているのであり、宗教的実践とはいえ、認識と行動の一致を目指すものであることは言うまでもない。この質問に対して

爾時善住比丘。告善財言。善哉善哉。善男子。乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。能問佛法一切智法及無師法。⁽³⁸⁾

善住比丘の返答は『すばらしいことである。善男子よ。あなたは能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して佛の法と一切智と無師の法を問われた。』と善財童子の質問を「能問佛法一切智法及無師法。」と佛法と一切智法及び無師法に捉え直した上で、

善男子。我已成就菩薩無礙法門。我已修習分別了。逮得無礙明淨慧光。得慧光已。觀察一切衆生心行無所障礙。觀一切衆生死此生彼無所障礙。於宿命智無障礙。於未來智無所障礙。於現在世知一切衆生無所障礙。於一切衆生語言法中無所障礙。若一切衆生來問難者悉能應答無所障礙。知一切衆生根無所障礙。教化衆生無所障礙。分別了知一切剎那羅婆摩睺路無所障礙。於三世海無所障礙。己身充滿十方佛刹無所障礙。何以故。依無所有無作神通力故。⁽³⁹⁾

私は既に菩薩の無礙の法門を成就している。わたしは既に既に修習し分別し明了に無礙の明淨慧光を逮得している。すなわち、無礙の法門に

没頭し、それを探求し、分析し、熟慮することによってそれを現前にとらえることによって無礙の明淨慧光に到達することができたのである。無礙の明淨慧光の故に一切衆生の心行を観察するのに障礙なく、一切衆生のこの世での死を観ずるに障礙する所なく宿命の智に於て障礙なく、未來智に於て障礙する所なく現在世に於て一切衆生を知ること、一切衆生の語言法の中に障礙する所なく、もし一切衆生が來りて難解な問題を訪ねてもそれに応答するのに障礙する所なく、一切衆生の行為の善惡の決め手となる心の根源を知るにも障礙する所なく、衆生を教化するにも障礙する所ない。分別して一切の刹那羅の摩睺路を了知するにも障礙する所なく、三世の海に障礙する所なく、自分の身は十方の佛刹に充滿して、障礙する所は無い。というのは私が無作為の神通力をもっているからである。無礙の明淨慧光に達することで衆生の心行・衆生のを観じとること・宿命の智・未來智・現在世での衆生を知ること・衆生の言・衆生の難問への応答・衆生の行為の擧り所・衆生の教化・三世の大海を知ること何らの障壁もなく自分自身を佛の世界に充滿させることにも何らの障壁もないようにすることができるようになっている。私には神通力が備わっているからである。このように神通力をもつことで明淨慧光を得ることを明示し、

善男子。我得此神通力故。於虛空中行住坐臥。遊騰十方。於一念中。遍至東方一佛世界百佛世界。千佛百千佛無量佛世界。乃至不可說不可說諸佛世界。閻浮提微塵等世界。乃至不可說不可說佛刹微塵等世界。悉得親見彼世界中一切諸佛及其眷屬。以一切華香末香塗香。寶鬘幢幡。雜綵繪蓋。衆妙寶網。一切形像。供養彼如來應供等正覺。彼諸如來所可開現。宣明讚歎。悉聞受持。分別通達。彼佛所有過去淨刹。我悉憶念。南西北方四維上下亦復如是。若有衆生得見我者。皆悉畢定阿耨多羅三藐三菩提。如我所見。一切衆生若大若小。若好若醜若苦若樂。爲化度故。隨其所應現同彼身。若有衆生來至我所。悉令安住於此正法。⁽⁴⁰⁾

善男子よ。そうした神通力をもっているために私は虚空に行住坐臥し、十方を遊騰し、ほんの一念するだけで東方世界の諸佛世界……に達し、その世界の諸佛およびその眷屬を親見することができ、種々の香などで飾られた形像を彼の如來・應供・等正覺に供養し、諸々の如來の開現・宣明・讚歎すべき所は悉く聞いて受持・分別・通達している。興味深いことに神通力によって善住比丘が達成しえたことの最初の例として「於虛空中行住坐臥」を掲げていることである。私たちにとってはかのオウム真理教の修行の一例として「空中浮揚」を思い起こさせるもの（オウム真理教が「信者」を「マインド・コントロール」するために薬物を使用し水中クンバカを用い、無呼吸と過呼吸の徹

底した繰り返しを信者に行わせたことは夙に有名である⁽⁴¹⁾）でもあるが、不可思議なることを成し遂げる「神通力」の表現として人間の限界の超越を観念の上で達成するのか現実世界に求めるかの差異が色強く現れたものと指摘できよう。神通力は念ずることで東方の一佛世界から不可説不可説諸佛世界・閻浮提微塵等世界・不可説不可説佛刹微塵等世界に遍く及び、一切華香末香・塗香・寶鬘・幢・幡・雜綵繒蓋・衆妙寶網・一切形像によって如來・應供等の正覺を得たものを供養する。彼の如來が開現・宣明・讚歎すべき所を私は悉く聞いて受持・分別・通達している。私は如來のすべて受持・分別・通達しているのであり、彼の佛の過去の淨刹をわたしは悉く憶念している。私は佛の世界を、佛の説かれることをすべて受持・分別・通達しているのであり、佛の過去の淨刹をもすべて憶念しているのである。私を見ることのできた衆生は阿耨多羅三藐三菩提を畢定するであろう。衆生で私の所にやってくる者があれば、悉くこの正法に安住するであろう。私に接した人は菩提心を窮めることができ、私を訪ねてくる者は誰でも正法に安住することができよう。私は佛の爲變として現出しているのである。私を見れば菩提心が発せられ、窮められ、正法に安住することが出来ると断言しているのである。

善男子。我唯知此一無礙法門。云何能說菩薩修大悲戒。諸波羅蜜戒。乘大乘戒。不捨菩薩道戒。滅障礙戒。菩薩藏戒。不捨菩提心戒。一切佛法深心戒。念一切智不忘失戒。如虛空戒。一切世間無所依戒。不可壞戒。無譬諭戒。不濁戒。不雜戒。離疑戒。清淨戒。離塵戒。離垢淨戒。善男子。菩薩有如是等無量功德。我豈能知如實解說。善男子。於此南方。有一國土名曰自在。域名呪藥。彼有良醫名曰彌伽。汝詣彼問。云何菩薩向菩薩行。時善財童子。禮善住比丘足。乃至辭退南行。⁽⁴²⁾

私（『善住比丘』は無礙の法門を知っているだけであり、どうして能く菩薩の大悲を修する戒律、諸々の波羅蜜の戒律、大乘に乘る（『大乘佛教を信ずるための』）戒律、菩薩の道を捨てないという戒律、障礙を滅する戒律、菩薩藏の戒律、菩提心を捨てない戒律、一切佛法の深心の戒律、一切智を念じて亡失しない戒律、虚空のような戒律、一切世間のよるべのない戒律、壊すことのできない戒律、譬喩することのできない戒律、不濁の戒律、不雜の戒律、疑念を離れるという戒律、清淨の戒律、塵芥から離れるという戒律、離垢の戒律を説くことができようか。あなた。菩薩にはこのような無量の功德があるが、私はどうしてそれを如實に解説することを知っていようか。善男子よ、この南方に一國土があり、その名を自在といい、その城を呪藥という。その城内に彌伽という名の良医がいる。あなた、彼を訪ねて『どうして菩薩は菩薩の行に向かうのか』と尋ねなさい。大乘戒を聞くために彌伽への訪問を勧める。善財童子は僧と戒とを学び、第三の修行住に

到達し、善住比丘の所を辞して南へ向かった。

爾時善財童子。一心正念法光法門。具足法力正念諸佛。不斷三寶歎離欲性。念善知識。普照三世。念諸大願。究竟一切法界衆生。於一切有爲心無所著。觀察一切諸法無常。悉能嚴淨一切佛刹。心無懈怠。於一切佛及其眷。心無所著。漸至彼國。入呪藥城。求良醫彌伽。今在何所。爾時童子。見彼良醫。處正法堂。論師子座。與一萬大衆前後圍遶爲説輪字莊嚴經。時善財童子。詣醫彌伽。頭面禮足。右邊畢。退住一面。⁽⁴³⁾

その間中、彼は一心に法光法門を正念して、法力を具足し、諸佛を正念して、三寶を斷ずることなく、離欲の性を讃歎して、善知識を念じて普く三世を照らし、諸々の大願を念じて一切法界の衆生を究めつくし、一切の有爲に於いて心に所著なく、一切異常なることを觀察し、悉く能く一切の佛刹を嚴淨し、心に懈怠なく、一切の佛、およびその眷屬に於いて心に執着なく、ようやく自在國に到り、良醫彌伽を求めて『今どこにおられるのですか』と尋ねた。その時彼の良医は正法を説く堂におられて説法の獅子座に座し、毫萬の大衆に取り囲まれて輪字莊嚴經を説いておられた。

合掌白言。大聖。我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何向菩薩行。云何學菩薩行。云何於生死中。常能不失菩提之心。云何得平等心。而無所趣。云何速得堅固正直之心。一切世間無能壞者。云何生大悲力。而無憂惱。云何證淨普門陀羅尼力。云何生智慧光。於一切法除滅癡闇。云何證諸辯力。分別諸法眞實之藏。云何得正念。受持一切清淨法輪。未曾忘失。云何得淨趣力。於一切趣普照諸法。云何得智慧力。於一切法得決定智了眞實義。⁽⁴⁴⁾

善財童子は良医彌伽に合掌して白した。『大聖よ、私は阿耨多羅三藐三菩提心を發しましたが、未だ菩薩はどうして菩薩の行に向かい、菩薩の行を学び、生死の中に常に能く菩提の心を失わないか、平等の心をもって所趣もなく、堅固な正直な心を速得して一切世間を能く壊すこともなく、大悲の力を生じて憂悩もなく、淨普門の陀羅尼力を証明し、智慧の光を生じて一切の法に於いて癡闇を除滅し、諸々の辯力を生じて諸法の眞實の藏を分別し、正念の力を得て一切清淨の法輪を受持して未だ曾って忘失しないでおられるのか、淨趣の力を得て一切趣に於いて普く諸法を照らし、智慧の力を得て一切法に於いて決定智を得、眞實の義を了うとしておられるのか』と。善財童子の發問は「云何學菩薩行・於生死中、云何得平等心、云何生大悲力、云何生智慧光、云何證諸辯力、云何得淨趣、云何得智慧力」とその内実を深化

させている。

爾時良醫。謂善財言。善男子。汝已先發阿耨多羅三藐三菩提心耶。答言唯然。爾時良醫下師子座。五體投地敬禮善財。禮已。散妙金華。……敬重讚歎。作如是言。善哉善哉。善男子。乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。若有能發阿耨多羅三藐三菩提心者。則爲守護一切佛性。嚴淨一切諸佛刹性。化衆生性。爲一切衆生說如法性。順一切業性。成滿一切菩薩行性。不斷一切諸大願性。解離欲性。智慧明淨普照三世一切法性。建解脫性。⁽⁴⁵⁾

これに対して良医彌伽は『善男子よ、ほんとうにあなたは阿耨多羅三藐三菩提心を發せられたのですか』と問い直し、善財が『そうです』と答えると、師子座から下りて、五體投地をされ、善財に敬礼して、衆妙の供具で供養し、敬重讚歎して、『すばらしいことです、善男子よ。あなたは阿耨多羅三藐三菩提心を發せられた。善男子よ。阿耨多羅三藐三菩提心を發した人は、即ち一切の佛を守護する性、一切諸佛の刹を嚴淨する性、衆生を教化する性、一切衆生に如法を説く法、一切の業に順ずる性、一切の菩薩の行を成滿する性、一切の諸々の大願の実現を斷念しない性、離欲を解る性、智慧は明淨にして普く三世一切の法を照らす性、解脫を建てる性となるのです。このように菩提心を發することによってその人の本性が佛を守護し、諸佛の刹（『佛國土』）を嚴淨し、衆生を教化し、衆生に妙法を説き、業に逆らわず菩薩の行を滿たし、佛道を究めたいという大願の成就を斷念せず、離欲を解り、明淨な智慧によって一切の法を反映し、解脫を可能にするものとなると捉え、人格が菩薩の本性に化することを明示する。發心が人格の変容を齎すとするのである。

當知菩薩能爲一切衆生。作甚難事。難值難見。爲一切衆生而作父母。莊嚴衆生。攝取一切諸天世人。除滅衆生無量苦難。守護衆生遠離憂惱。菩薩爲大風輪。安持衆生。不令墜落三惡道故。菩薩爲大地。生長一切諸善根故。菩薩爲大海。具足無盡功德藏故。菩薩爲日。明淨慧光。普照世間。滅癡闇故。菩薩爲須彌山王。功德善根最高大故。菩薩爲月。令一切衆生悉清涼故。菩薩爲大將。悉能降伏一切魔故。菩薩爲善丈夫。於法城中爲君王故。菩薩爲火。能燒衆生諸貪愛故。菩薩爲雲。雨甘露法故。菩薩爲正見。悉能長養諸妙根故。菩薩爲方。顯法海故。菩薩爲橋。令諸衆生度生死海故。⁽⁴⁶⁾

當に知るべし。菩薩は能く一切衆生のために甚だ難きことを爲し、値い難く見難し。一切衆生のために父母となりて衆生を莊嚴し、一切の諸天と世人とを攝取し、衆生の無量の苦難を除滅し、衆生を守護して憂悩を遠離させる。菩薩は大風輪なり。衆生を安持して三惡道に墜

落させないが故に。菩薩は大地である。一切を生長するが故に。菩薩は大海なり。無尽の功德蔵を具足する故に。菩薩は日である。明淨の慧光は普く世間を照らして癡闇を滅するが故に。菩薩は須彌山王なり。功德善根最も高大なるが故に。菩薩は月なり。一切の衆生をして悉く清涼ならしめるが故に。菩薩は大將なり。悉く能く一切の魔を降伏させるが故に。菩薩は善丈夫なり。法城の中に於いて君王となるが故に。菩薩は火なり。能く衆生の諸々の貪愛を焼くが故に。菩薩は雲なり。甘露の法を降らせるが故に。菩薩は正見なり。悉く能く妙根を長養するが故に。菩薩は方なり。法海を顕わすが故に。菩薩は橋なり。諸々の生死の海を度らせるが故に。』と最大限の美辭麗句で菩薩を讃嘆し

爾時良醫。稱揚讚歎善財童子及諸菩薩。已即從口中放大光雲。普照三千大千世界。……告善財言。善男子。我已成就所言不虛法門。

分別了知三千大千世界諸天語言。諸龍夜叉闍婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等一切語言。如此三千大千世界。十方無量無邊不可說不可說三千大千世界。亦復如是。⁽⁴⁷⁾

爾の時に良醫は、善財童子及び諸々の菩薩を稱揚し讚歎し已りて、即ち口中より大光の雲を放ち、普く三千大世界を照らせり。……善財に告げて言われた、『善男子よ。私は既に所言不虛の法門を成就して三千大千世界の諸天の語言、諸々の龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の一切語言を分別し了知した。この三千大千世界の如く、十方無量無邊の不可說不可說の三千大千世界も亦同様である。』

善男子よ。私は唯だこの菩薩の所言不虛の法門を知るだけである。どうして能く諸々の菩薩の行を説くことができようか。彼の諸々の菩薩は、随順して深く衆生的一切相海に入り、随順して深く衆生的一切施設海に入り、随順して深く諸々の名号海に入り、随順して深く諸々の語言海に入り、随順して深く諸句の相続海に入り、随順して深く諸々の解脱句の次第海に入り、随順して深く諸々の解脱句の相続次第海に入り、随順して深く如来海に入り、随順して深く分別諸句海に入り、随順して深く一切衆生の諸々の語言海に入り、随順して深く一切衆生の諸々の語言海に入り、一切の円満莊嚴微妙の音声を逮得して諸々の文字輪を出生し分別した。菩薩所言不虛法門により「出生分別諸文字輪」とあらゆることばを分別・了知する。

良醫彌伽から教えられた善財童子は第四の生貴住を得るのである。

善男子。於此南方。有一國土名曰佳林。彼有長者名曰解脫。汝詣彼問。云何菩薩。向菩薩道修菩薩道。成菩薩道思菩薩道。時善財童子。於良醫所聞此法門。發深淨信心。恭敬於法。決定知見。因善知識。得薩婆若。頭面禮足。乃至辭退南行。⁽⁴⁸⁾

善男子よ。この南方佳林という国があり、そこに解脱という名の長者がおられる。あなたはそこに行つて「どのようにして菩薩は菩薩の道に向かい、菩薩の道を修め、菩薩の道を成し、菩薩の道を思ふのか」尋ねなさいと。この時に善財童子は良医彌伽の所でこの法門を聞き、深淨の信心を發して恭敬し、法において知見を決定し、善知識によつて一切智を得て、頭面に足を礼して辭退して南に向かった。

爾時善財童子。正念菩薩所言不虛法門。入菩薩語言海。念一切衆生微細方便海。思惟菩薩諸垢淨法。出生菩薩善根光明。淨修菩薩教化衆生巧方便門。明淨菩薩攝衆生智。堅固菩薩正直心力。長養菩薩深心之力。淨修菩薩種種欲力。信菩薩心。遠離諸惡。願心堅固。以大莊嚴而自莊嚴。心無疲倦。勇猛精進心。不退轉。具不可壞淨信心力。金剛那羅延。所不能壞。攝取一切善知識教。無礙境界皆悉清淨。無垢境界妙心現前。逮得普眼方便光明陀羅尼地。了法界地心常現前。知平等地非地。莊嚴清淨。不著我所無二境界。逮得清淨無礙智慧。了知法地無所障礙。知諸方地而不退轉。分別了知一切業地。嚴淨顯現諸佛大地。得智慧輪分別三世。逮得普樂光明三昧。遍照身心。順至一切諸境界地。如來智慧普照境界。興起一切智慧波浪身。常不離佛法勢力。爲諸如來之所護持。其心悉與一切佛等。隨順智慧普照一切。其身充滿一切剎網。成就大願。己身容受一切法界。如是念已。漸漸遊行。經十二年至佳林國。周遍推求解脫長者。見已禮足。於一面住。作如是念。我得善利。見善知識。善知識者出興世難。至其所難。得值遇難。得見知難。得親近難。得共住難。得其意難。得隨順難。念已。白言大聖。⁽⁴⁹⁾

佳林への途上、善財は菩薩の所言不虛の法門を正しく念じ、菩薩の語言界に入り、一切衆生の微細の方便海を念じ、菩薩の諸々の垢淨の法を思惟し、菩薩の善根光明を出生し、菩薩の衆生を教化する巧方便を淨修し、菩薩の衆生に摂する智を明淨にして、菩薩の正直心の力を堅固にし、菩薩の深心の力を長養し、菩薩の種種欲の力を淨修し、菩薩の心に諸惡を遠離することを信じ、願心堅固にして大莊嚴を以て自らを莊嚴し、心に疲倦無く、勇猛精進して心退轉せず、壞すことのできない淨き信心の力を具えて、金剛那羅延も壞ることができないようになり、一切の善知識の教えを摂取して、無礙の境界は皆悉く清淨となり、無垢の境界は妙心に現前した。普眼の方便光明陀羅尼地を逮得して、法界地に了し、心常に現前して、平等地と非地とを知り、莊嚴清淨にして我所に執着せず、無二の境界に、清淨無礙の智慧を逮得し

て、法地を了知して障礙する所なく、諸々の方地を知って退転しない。一切の業地を分別し了知して、諸佛の大地を嚴淨して、顯現して、智慧輪を得て三世を分別して、普樂光明三昧を逮得して、遍く身心を照らし、一切諸々の境界地に順至して、如來の智慧は普く境界を照らし、一切智慧の波浪を興起して、身常に佛法の勢力を離れず、諸々の如來の護持される所となつて、その心は悉く一切の佛と等しく、隨順智慧は普く一切を照らし、その身は一切の剎網に充滿して、大願を成就し、己が身に一切の法界を容受した。このように念じ終つた時、漸漸に遊行し、十二年を経て佳林國に至り、あたりを見回して解脫長者を見つけ出した。『私は幸運にも善知識に出會うことができた。善知識は世間に現れることも稀であり、そのもとに行くことも難しく、知遇を得ることも難しく、見知りになることも難しく、親近することも難しく、共に住むことも難しく、その人の意志を知ること難しく、隨順を得ることも難しい』と念じていた。念じ終つてから白した。

我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。欲値一切佛。欲見一切佛。……白言。我聞大聖善教菩薩方便正道。普照一切顯現妙法。示導津濟開正法門。除滅顛倒拔疑惑刺。心離迷垢照除重闇。離諸煩惱永清涼。棄捨諂曲超出生死。離不善根長養善根。遠離諸趣無所染著。滅一切障求薩婆若。到法王城。其心安住大慈大悲。教菩薩行修諸三昧。其心安住隨順法門。發廣大心具足諸力。照明一切諸群生心。唯願大聖。爲我分別。云何菩薩。向菩薩道修菩薩道。既修習已。令速清淨菩薩之行。具成菩薩圓滿淨行。⁽⁵⁰⁾

『(大聖よ、)私は既に阿耨多羅三藐三菩提心を發して、一切の佛に回り逢いたいと願ひ、一切の佛を見奉りたいと願ひ、……白す。』私は大聖が善く菩薩の方便正道を教えて、普く一切を照らし、妙法を顯現して、津濟を示導し、正法の門を開いて、顛倒を除滅し、疑惑の刺を抜き、心の迷いの垢を離れて、暗い闇を照除して諸々の煩惱を離れて、永く清涼を得させ、諂曲を棄捨して生死を超出し、不善根を離れて善根を長養し、諸趣を遠離して染著する所なく、一切の障を滅し、一切智を求めて、法王城に到り、その心を大慈大悲に安住させ、菩薩の行を教えて、諸々の三昧を修させ、その心は隨順の法門に安住して、廣大の心を發し、諸力を具足して一切諸々の群生の心を照明されると。唯願わくは大聖、私のために分別して下さい。どのようにして菩薩は菩薩の道に向かい、菩薩の行を修し、既に修習し終わりて、速やかに菩薩の行を清淨にし、具さに菩薩の圓滿なる淨行を成すかを。』と質問を「云何菩薩。向菩薩道修菩薩道。既修習已。令速清淨菩薩之行。具成菩薩圓滿淨行。」と變化させている。

時解脫長者。以過去善根力佛威神力文殊師利憶念力故。入菩薩三昧門。其三昧門。名攝一切佛剎無量旋陀羅尼。入已。得清淨身。於

其身内。……⁽⁵¹⁾

爾時解脫長者。從三昧起。告善財言。善男子。我已成就如來無礙莊嚴法門。得此法門已。親見東方閻浮檀光世界。星宿王如來應供等正覺。明淨藏菩薩等一切大衆。又見南方諸力世界。普香如來應供等正覺。心王菩薩等一切大衆。……善男子。我若欲見安樂世界無量壽佛。隨意卽見。妙樂世界阿閼如來。善住世界師子如來。……如是等一切諸佛。隨意卽見。彼諸如來不來至此。我不往彼。知一切佛無所從來。我無所至。知一切佛及與我心皆悉如夢。知一切佛悉如電光。了知己心如水中像。知一切佛皆悉如幻。己心亦爾。知一切佛音聲如響。己心亦爾。如是知。如是解。如是入。善男子。當知菩薩皆由己心。得諸佛法修菩薩行。淨一切刹教化衆生。出諸大願一切智城。遊戲神通不思議門。諸佛菩提一切自在無礙境界。皆由己心。具甚深智了一切法。是故善男子。以諸善根增長己心雨甘露法潤澤其心。於境界中令心清淨。勤修精進令心堅固。專念正法令心不亂。智慧明淨遠離心垢。明淨慧光照察其心。生自在心發廣大心。與諸佛等。如來十力以照其心。⁽⁵²⁾

その時解脫長者は、過去の善根力と、佛の威神力と文殊師利の憶念力によって、撰一切佛刹無量旋陀羅尼という名の菩薩の三昧門入った。……三昧から立ち上がって解脫長者は、善財に告げて言った。『善男子よ、私は既に如來の無礙莊嚴の法門を成就した。この法門を得終わって、東方の閻浮檀光世界に、星宿王如來應供等正覺と、明淨藏菩薩等の一切の大衆とを見ました。又南方の諸世界に普香如來應供等正覺と、心王菩薩等の一切の大衆とを見ました。……善男子よ、私は若し安樂世界の無量壽佛を見ようと願うならば、自分の意志に随って妙樂世界の阿閼如來、善住世界師子如來……これらの一切の佛を見ることができるようになった。……彼の諸々の如來はここに來られもせずわたしもそこには往きもしません。一切の佛は來られる所もなく、私も佛の居られるところまで行くことはできません。一切の佛と私の心とは夢の如くであり、電光の如くであることをしり、自分の心は水中の像の如きであると了知し、一切の佛は幻の如きであると知る。自分の心も亦同じである。一切の佛の聲は響きの如きものであると知る。自分の心も同じである。このように知り、理解し、このような心境に達することは、善男子よ、当に知るべきである。菩薩は皆己の心によって、諸佛の法を得、菩薩の行を修し、一切刹を淨め、衆生を教化し、諸々の大願を出し、一切の智城、遊戲の神通・不思議門、諸佛菩薩の一切の自在無礙の境界は皆己が心により、甚深の智を具し、一切の法を了る。このために、善男子よ、諸々の善根をもって己がゆえに己の心を増長し、甘露の法を雨ふらしその心を潤沢にし、境界の中にお

いて心を清浄にしていまい、精進を勤修して心を堅固にさせ、専ら正法を念じて心を不乱ならしめ、智慧明浄にして心垢を遠離し、明浄の慧光をもってその心を觀察し、自在の心を生じ、広大の心を發して、諸佛と等しく、如来の十力によってその心を照らすべきであると。

善男子。我唯修此如来無礙法門。云何能說菩薩諸行。無障礙智。無礙淨行。安住觀察現在諸佛三昧。得無涅槃三昧。具足三世平等正法。善知平等三昧境界之地。具足淨身。住諸佛住。不壞境界。一切諸方法門境界。智門圓滿。智慧觀察。普照一切於己身中悉現一切世界成壞。而於己身及諸世界不生二想。究竟衆行功德具足。善男子。於此南方。有一國土名曰莊嚴閻浮提頂。彼有比丘名曰海幢。汝詣彼問。云何菩薩。向菩薩道修菩薩行。時善財童子。頭面敬禮解脫長者足。右邊畢。讚歎無量阿僧祇功德。眷仰觀察。心無厭足。悲泣流淚。專念善知識。順善知識。觀善知識。由善知識得一切智。於善知識遠離諂曲。於善知識發慈母心。遠離一切無益法故。於善知識發慈父心。能生一切諸善法故。辭退南行。⁽⁵³⁾

善男子よ、私は唯この如来の無礙法門を知っているだけである。どうして能く菩薩の諸行と、無障礙の智と、無礙の淨行とを説くことができるのか。現在を觀察する諸佛の三昧に安住して、無涅槃の三昧を得、三世平等の正法を具足して、善く平等三昧の境界地を知り、淨身を具足して、諸佛の住まわれる不壞の境界に住み、一切諸方の法門の境界は、智門圓滿にして、智慧觀察して、普く一切を照らし、己が身の中において悉く一切世界の成壞を現じ、己が身と諸々の世界において二想を生ぜず、衆の行をきわめて功德具足しうる。善男子よ、この南に莊嚴閻浮提頂という国がある。そこに海幢という比丘がおられる。おまえさん、そこへ行つて彼に問いなさい。「どのように菩薩は菩薩の道に向かい、菩薩の行を修するのか」と。こうして善財童子は方便住に達することとなった。

註

はじめに本稿では「六十華嚴」と呼ばれる佛陀跋陀羅譯(晉經もしくは旧譯と呼ばれることもある。以下④と略記)のものを中心に考察する。「八十華嚴」と呼ばれる實叉難陀譯のもの(唐經もしくは新譯とも呼ばれる。則天武后の序文が添えられてある。以下⑤と略記)と「入法界品」の別譯である「四十華嚴」(貞元經もしくは単に普賢行願品とも称されるもの。以下⑥と略記)がある。そのほかに梶山雄一氏らの梵語から「入法界品」の日本語訳『さとりの遍歴』(以下⑦と略記)もなされているし、韓国の高銀という作家・詩人は入法界品を素材とした小説『華嚴經』(Hwaeunggyong)も刊行されているし、昨年(二〇〇三年十月)には海音寺潮五郎の『人生遍路 華嚴經』も復刊されているし、東大寺の森本公誠師は『さとりの遍

歴」をもとに『善財童子 求道の道』を刊行されている。ほかに解説書としては木村清孝氏の『華嚴經を読む』および鎌田茂雄氏の『華嚴の思想』や『仏教の思想』（全十二巻）の中に鎌田茂雄・上山春平著『無限の世界観「華嚴」』などがある。

(1) 川田熊太郎「佛陀華嚴——華嚴經の太郎監修太郎監修考察——」二二頁〜二四頁（川田熊太郎監修・中村元編『華嚴思想』所収）

(2) ④では大正大藏經卷九 六三一頁中段 ⑤では「爾時世尊。在摩竭提國阿蘭若法菩提場中普光明殿。坐蓮華藏寶師子座。妙悟皆滿。」（大正大藏經卷十 二七九頁上段）とあり、「寂滅道場」が「菩提場」となっている。

(3) ④では大正大藏經卷九 六三一頁下段 ⑤では「爾時普賢菩薩摩訶薩入廣大三昧。名佛華莊嚴。入此三昧時。十方所有。一切世界。六種十八相動。出大音聲。靡不皆聞。然後從其三昧而起。」（大正大藏經卷十 二七九頁中段）とあり、「正受三昧」が「廣大三昧」となっている。

(4) ④では大正大藏經卷九 六三一頁下段 ⑤では二七九頁中段

(5) ④では大正大藏經卷九 六三二頁下段 ⑤では「爾時普賢菩薩。知衆已集。問普賢菩薩言。何爲菩薩摩訶薩依。何等爲奇特想。……」（大正大藏經卷十 二八〇頁中段）。「有十種依果」が⑤では「何等爲菩薩摩訶薩依。何等爲奇特想。……」とされている。

(6) ④では大正大藏經卷九 六三三頁上段「菩薩摩訶薩。有十種善知識。何等爲十。所謂令住菩提心善知識。令生善根善知識。令行諸波羅蜜善知識。令解說一切法善知識。令成熟一切衆生善知識。令得決定辯才善知識。令不著一切世間善知識。令於一切劫。修行無厭倦善知識。令安住普賢行善知識。令入一切佛智所入善知識。」（大正大藏經卷十 二八〇頁下段）

(7) ④では「佛子。菩薩摩訶薩。有十種戒。何等爲十。所謂不壞菩提心戒。離聲聞緣覺地戒。饒益觀察衆生戒。令一切衆生住佛法戒。一切菩薩學戒。一切無所有戒。一切善根廻向菩提戒。不著一切如來身戒。」（大正大藏經卷九 六三二頁下段）と八つしか戒を挙げているが、しかし、⑤では「佛子。菩薩摩訶薩。有十種戒。何等爲十。所謂不捨菩提心戒。遠離二乘地戒。觀察利益一切衆生戒。令一切衆生住佛法戒。修一切菩薩所學戒。於一切法。無所得戒。以一切善根。廻向菩提戒。不著一切如來身戒。思惟一切法。離取著戒。諸根律儀戒。是爲十。」（⑥大正大藏經卷十 二八一頁上段）と十種の戒を掲げている。

(8) ④では大正大藏經卷九 六七六頁上段 ⑤では「爾時世尊。在室羅筏國逝多林給孤獨園大莊嚴重閣。與菩薩摩訶薩。五百人俱。普賢菩薩。文殊師利菩薩。而爲上首。其名曰光焰幢菩薩。須彌幢菩薩。……此諸菩薩。皆悉成就普賢行願。」（大正大藏經卷十 三一九頁上段） ⑥では「一時佛在室羅筏城。逝多林。給孤獨園。大莊嚴重閣。與菩薩摩訶薩五千人俱。普賢菩薩摩訶薩。文殊師利菩薩摩訶薩。而爲上首。其名曰智慧勝智菩薩。普賢勝智菩薩。……如是等上首菩薩摩訶薩。一切皆從普賢菩薩。行願所生。所行無礙。普遍一切諸佛刹故。」（⑦大正大藏經卷十 六六一頁上段） ④では「あるとき、（釈迦牟尼）世尊はシュラーヴァステイ（舍衛城）に滞在しておられ、ジェータ（太子）の林であり、アナータピンダダ長者の園（祇樹給孤獨園）にあるマハーヴューハという樓閣（大莊嚴重閣講堂）に、サマンタパドラ（普賢）菩薩とマンジュシュリー（文殊師利）菩薩とを初めとする五千人の菩薩たちと一緒にあった。（それらの菩薩とは）即ち、ジュニャーノータラ・ジュニャーニン（智勝勝智）菩薩摩訶薩、サットヴォーッタラ・ジュニャーニン（衆生を超えた智ある者、普賢勝智）、……（釈迦牟尼世尊とともにいる）上述の者たちを初めとする五千人の菩薩たちはみな、普く優れた（普賢）菩薩行と（その）誓願に熟達していた。あらゆる仏国土に遍満するために、その行動範囲（境界）は妨げられることのないものであった。（④の一九頁）とあり、表現に若干の相違が見られる。

- (9) ②大正大藏經卷九 四一八頁中段 ⑤大正大藏經卷十 五八頁上段
- (10) ②大正大藏經卷九 六八六頁下段 ⑤では「爾時文殊師利童子。從善住樓閣出。與無量同行菩薩。及常隨侍衛諸金剛神。普爲衆生。供養諸佛諸身衆神。久發堅誓願常隨從諸足行神。樂聞妙法主地神。常修大悲主水神。……恒願拔濟一切衆生出諸有海迦樓羅王。願得成就諸如來身高出世間阿脩羅王。見佛歡喜曲躬恭敬摩睺羅伽王。常厭生死恒樂見佛書體天王。尊重於佛讚歎供養諸大梵王。文殊師利。與如是等功德莊嚴諸菩薩衆。出自住處。佛來詣所。右邊世尊。經無量匝。以諸供具種種供養。供養畢已。辭退南行。往於人間。」(⑥大正大藏經卷十 三三〇頁中段) ⑥では「爾時文殊師利童子。從善住樓閣出。與無量同行大菩薩衆。及常隨侍衛諸金剛神。普爲世間。現大威力身衆神。久發堅誓供養諸佛足行神。念昔大願樂聞正法相續不斷主地神。深淨大悲莊嚴法界普潤衆生主水神。……恒願拔濟一切衆生度生死海迦樓羅王。願諸衆生普得成就超諸世間如來力身阿脩羅王。曲躬恭敬樂見諸佛種種功德摩睺羅伽王。深厭生死常樂瞻仰諸佛相好諸大天王。尊重於佛恭敬供養稱揚讚歎諸大梵王。文殊師利。與如是等種種色像威德莊嚴大菩薩衆。及諸世主。前後圍繞。從自住處來詣佛所。右邊如來。經無量匝。以諸供具種種供養。供養畢已。頂禮辭退。右邊而。往於南方。」(⑦大正大藏經卷十 六七五頁中段) ④では「そこで、プラティシュターナ(善安住)という樓閣にいたマンジュシュリー(文殊師利)法王子は、同じような経歴の菩薩たちを伴って、さらには常に(守護して)離れない金剛力士たち、あらゆる世界のために力を發揮することに専念してあらゆる仏に仕えたいとの誓願の心をもつ身衆神たち、往昔の誓願から離れない足行神たち、法の聴聞を求める主地神たち、大悲の心を実践する泉、湖、小湖、池、井戸の主水神たち、……あらゆる衆生を輪廻の生存の海から救い取ることを誓願し実践するガルダの王たち、あらゆる世間の上にそびえたつために如来の身体と力を成就しようとの誓願が生じているアスラの王たち、如来にまみえる喜びを得て身体を屈して(礼拝する)マホーラガの王たち、心は輪廻を恐れて、顔は(諸仏を)仰ぎ見る神々の王たち、深い尊敬の念をいだいて身体を屈して(礼拝する)梵天たちを伴って、また彼らによつて深い尊敬の念でもって讃嘆されほめ讃えられて、文殊師利菩薩は、このような菩薩の威力の莊嚴さを完備して、自分の精舎を出でて、世尊の周りを幾百回も右邊し、多様な供養をした後に世尊の下を去り、南方へ向かい諸々の地方の遊行に出発した。」(⑧八八頁) 出典により若干の相違が認められる。④の「同じような経歴をもつ」菩薩たちの表現は漢訳のものには現れていない表現である。
- (11) ②大正大藏經卷九 六八六頁下段 ⑤大正大藏經卷十 三三〇頁下段 ⑥大正大藏經卷十 六七五頁下段 ⑧八九頁 ⑨・⑩では同行する比丘の数が六千、⑪・⑫では六十となっている。
- (12) ②大正大藏經卷九 六八七頁上段 ⑤では「爾時尊者舍利弗。在行道中。觀諸比丘。告海覺言。……」(⑥大正大藏經卷十 三三一頁上段) ⑥でも「爾時尊者舍利弗。將諸比丘。隨路而行。觀諸比丘。告海覺言。……」(⑦大正大藏經卷十 六七五頁下段) と語る対象が晉經では「海智」であるのに対し、⑪・⑫では「海覺」となっているし、④ではサーガラブディ(海智)とされている(④九〇頁)。
- (13) ②大正大藏經卷九 六八七頁中段 ⑤大正大藏經卷十 三三一頁中段 ⑥大正大藏經卷十 六七六頁中段 ⑧九二頁 ⑨では「爾時文殊師。告諸比丘言。比丘。若善男子善女人。成就十種趣大乘法。則能速入如來之地。況菩薩地。何等爲十。所謂積集一切善根心無疲厭。見一切佛承事供養心無疲厭。求一切佛法心無疲厭。行一切波羅蜜心無疲厭。成就一切菩薩三昧心無疲厭。次第入一切三世心無疲厭。普嚴淨十方佛刹心無疲厭。教化調伏一切衆生心無疲厭。於一切刹一切劫中成就菩薩行心無疲厭。爲成熟一衆生故修行一切佛刹微塵數波羅蜜成就如來一力如是次第爲成熟一切衆生界成就如來一切力心無疲厭。比丘若善男子善女人。成就深信。發此十種無疲厭心。則能長養一切善根。捨離一切諸生死趣。超過一切世間種姓。

不墮聲聞辟支佛地。生一切如來家。具一切菩薩願。學習一切如來功德。修行一切菩薩諸行。得如來力。摧伏衆魔及諸外道。亦能除滅一切煩惱。入菩薩地。近如來地。時諸比丘。聞此法已。則得三昧。名無礙眼見一切佛境界。得此三昧故。悉見十方無量無邊一切世界諸佛如來。及其所有道場衆會。亦悉見彼十方世界一切諸趣所有衆生。亦悉見彼一切世界種種差別。亦悉見彼一切世界所有微塵。亦悉見彼諸世界中一切衆生所住宮殿。以種種寶而爲莊嚴。及亦聞彼諸佛如來種種言音演說諸法辭訓釋。悉皆解了。亦能觀察彼世界中一切衆生諸根心欲。亦能憶念彼世界中一切衆生前後十生。亦能憶念彼世界中過去未來各十劫事。亦能憶念彼諸如來十本生事。十成正覺。十轉法輪。十種神通。十種說法。十種教誡。十種辯才。又即成就十千菩提心。十千三昧。十千波羅蜜。悉皆清淨。得大智慧圓滿光明。得菩薩十神通。柔軟微妙。住菩薩心。堅固不動。爾時文殊師利菩薩。勸諸比丘。住普賢行。住普賢行已入大願海。入大願海已成就大願海。以成就大願海故心清淨。心清淨故身清淨。身清淨故身輕利故。身清淨輕利故得大神通無有退轉。得此神通故不離文殊師利足下。普於十方一切佛所。悉現其身。具足成就一切佛法。」◎では「爾時文殊師。告諸比丘言。若善男子善女人。成就十種趣大乘法。無疲厭心。則能速疾深入如來究竟之地。況菩薩地。何等爲十。所謂諸如來。以廣大心。親近供養。心無疲厭。積集成就。一切善根。究竟不退。心無疲厭。勤求一切諸佛正法。心無疲厭。勤行一切菩薩殊勝諸波羅蜜。心無疲厭。普遍修習一切菩薩甚深三昧。心無疲厭。次第趣入三世流轉一切諸法。心無疲厭。莊嚴十方一切刹海。悉令清淨。心無疲厭。教化調伏一切衆生。皆令成熟。心無疲厭。於一切刹。行菩薩行。經一切劫。心無厭。爲欲成熟一衆生故。修一切刹極微塵數波羅蜜門。成就圓滿如來一力。如是次第。爲一切衆生。成就如來一切智力。心無疲厭。比丘當知。若善男子善女人。成就深信。發此十種無疲厭心。則能長養一切善根。捨離一切生死流轉。悉能超出一切世間。不墮聲聞辟支佛地。成就如來。一切種姓。滿足菩薩清淨大願。積集一切如來功德。修行一切菩薩諸行。獲得如來力無所畏。摧伏衆魔及諸外道。除滅一切煩惱習氣。入菩薩地。近如來地。時諸比丘聞此法已。即時同證廣大三昧。名見一切佛境界無礙眼。得此三昧威神力故。悉見十方一切世界諸佛如來。及其所有道場衆會。亦悉見彼一切世界所有衆生種種趣各各差別。亦悉見彼一切世界同異染淨各各差別。亦悉見彼一切世界所有極微塵相差別。亦悉見彼世界中一切衆生所住宮殿。種種莊嚴。種種成就。及所受用。種種資具。各各差別。及聞彼佛。諸音聲海。演說諸法。種種名句。文詞訓釋。性相秘密。悉能解了。亦能觀察彼世界中一切衆生心行根欲各各差別。亦能憶念彼世界中一切衆生過去未來各十生事。亦憶念彼世界中過去未來各十劫事。亦能憶念彼如來十本生事。十成正覺。十轉法輪。十種神通。十種記心。十種教誡。十種說法。十種辯才。又由得此三昧力故。即時獲得十千眞實菩提之心。成就十千甚深三昧。具足十千諸波羅蜜。圓滿十千智慧光明。發起十光明。發起十千自在神力。以得如是菩薩三昧種種威神無礙勢力所莊嚴故。令其身心。柔軟微妙。增長信樂。住菩提心。堅固不動。爾時文殊師利菩薩。具足安住眞實吉祥微妙功德普賢行。勸諸比丘。令其安住勝普賢行。住勝行已。入於甚深廣大願海。入願海已。普遍成就甚深大願。以得成就大願海故。得心清淨。心清淨故得身清淨。身清淨故得身輕利。身輕利故利則得廣大不退神通。以得如是大神通故。不離文殊師利足下。普於十方一切世界諸如來所。悉現其身。具足成就一切佛法。」④では「文殊師利法王子は彼らにこう告げた。『比丘たちよ、以下の十種の倦怠なき心（十種大心）の発起を体得して、大乘（の教え）に向かって出発したものは、男女を問わず、如來の位に踏み込むのである。まして菩薩の位はいうまでもない。

その十種とは何か。それは即ち、①あらゆる如來にまみえ奉仕し供養しお仕えすることにおける倦怠なき心の発起、②あらゆる善根の集積から退転することのない倦怠なき心の発起、③あらゆる法の探求における倦怠なき心の発起、④あらゆる菩薩の波羅蜜の実践における倦怠なき心の発起、⑤あらゆる菩薩の三昧の完成における倦怠なき心の発起、⑥あらゆる世（三世）に次から次に間断なく入ることにおける倦怠なき心の発起、

⑦十方のあらゆる仏国土の海に遍満し浄化することにおける倦怠なき心の發起、⑧あらゆる衆生界を成熟させ教化することにおける倦怠なき心の發起、⑨あらゆる国土においてあらゆる劫に亘って菩薩行を完成することにおける倦怠なき心の發起、⑩あらゆる仏国土の微塵の数に等しい波羅蜜の実践によって一人の衆生を順次教化して、あらゆる衆生界を教化することによって一如來の力を成就することにおいて倦怠なき心の發起を(修得すること)である。

比丘たちよ、淨信深くこれらの十種の倦怠なき心の發起を体得するならば、男女を問わず、あらゆる善根に近づき、あらゆる輪廻転生の海から退き、あらゆる世俗の系譜を超越し、そしてあらゆる声聞や独覺位を踏み越える。さらにあらゆる如來の家系の系譜に生まれ、菩薩の誓願を成就し、あらゆる如來の功德の修得において浄化され、あらゆる菩薩行において浄化され、あらゆる如來の力に通達し、あらゆる魔や異教の師たちを粉碎し、あらゆる菩薩の位に歩み入り、如來の位へと近づく。

そこで比丘たちは、この法の真理を聞いて、『あらゆる仏を直観するのに無礙なる眼の境界』(見一切仏境界無礙眼)という名の三昧をえた。そしてその三昧の威力によって、十方の無限で無辺の世界に居住する(無数の)如來たちとその説法会を見ることができた。さらにまた、その(無数の)世界の中の諸々の衆生の境遇に生まれている衆生たち、その衆生たちを余す所なく見ることができた。その(無数の)世界が多種多様に区分されていることを見ることができた。その(無数の)世界にある限りの微塵、それらさえも一々数え上げてその数を知ることができた。その(無数の)如來たちが(法を説く)音声の海を聞くことができた。その(無数の)説法を、多種多様な語句や文字や語義の説明や名称や記号でもって、理解することができた。その(無数の)衆生たちの心や機根や志願を観察することができた。また、過去および未來の十生に及ぶ期間を憶念することができた。その(無数の)如來たちの十の法輪の言説(転法輪)の偉業に悟入することができた。(無数の)如來たちの十の神通による神變の偉業、(無数の)如來たちの十の説法の仕方(轉法輪)の偉業に悟入することができた。その(無数の)如來たちの十の教訓の語句の偉業に悟入することができた。その(無数の)如來たちの十の無礙の弁才(無礙弁)の方便の偉業に悟入することができた。そしてこの三昧を獲得するや、直ちに一万の菩提心の支分を成就することができた。一万の三昧に踏み込むことができた。一万の波羅蜜の要素を浄化することができた。その比丘たちは、偉大な光明を得て、偉大な智慧の輪に照らされて、十の菩薩の神通力をえることができた。

①では単に「十種大心」とされていたものが、②③では「十種趣大乘法」とされ、④では①と同じく「十種大心」の語句が用いられている。
 ②では「十種大心」を①發廣大心・長養一切善根、②見一切佛・恭敬供養、③正求一切佛法、④遍行菩薩諸波羅蜜、⑤具足一切菩薩三昧、⑥於一切三世流轉、⑦嚴淨佛刹・充滿十方、⑧教化成熟一切衆生、⑨於一切刹・一切劫中、行菩薩行、⑩發廣大心、修習一切佛刹微塵等諸波羅蜜、度脱一切衆生、具佛十力であるが、⑥では①積集一切善根②見一切佛承事供養③求一切佛法④行一切波羅蜜⑤成就一切菩薩三昧⑥次第入一切三世⑦普嚴淨十方佛刹⑧教化調伏一切衆生⑨於一切刹一切劫中成就菩薩行⑩爲成熟一衆生故修行一切佛刹微塵數波羅蜜成就如來一力如是次第爲成熟一切衆生界成就如來一切力⑪比丘若善男子善女人。成就深信となり、⑥では①見諸如來。以廣大心。親近供養②積集成就。一切善根。究竟不退③勤求一切諸佛正法④勤行一切菩薩殊勝諸波羅蜜⑤普遍修習一切菩薩甚深三昧⑥次第趣入三世流轉一切諸法。⑦莊嚴十方一切刹海。悉令清淨⑧教化調伏一切衆生。⑨於一切刹。行菩薩行。經一切劫。⑩爲欲成熟一衆生故。修一切刹極微塵數波羅蜜門。成就圓滿如來一力。爲一切衆生。成就如來一切智力であり、④では①あらゆる如來にまみえ奉仕し供養しお仕えすることにおける倦怠なき心の發起、②あらゆる善根の集積から退転することの

ない倦怠なき心の発起、③あらゆる法の探求における倦怠なき心の発起、④あらゆる菩薩の波羅蜜の實踐における倦怠なき心の発起、⑤あらゆる菩薩の三昧の完成における倦怠なき心の発起、⑥あらゆる世（三世）に次から次に間断なく入ることにおける倦怠なき心の発起、⑦十方のあらゆる仏国土の海に遍満することにおける倦怠なき心の発起、⑧あらゆる衆生界を成熟させ教化することにおける倦怠なき心の発起、⑨あらゆる国土においてあらゆる劫に亘って菩薩行を完成することにおける倦怠なき心の発起、⑩あらゆる仏国土の微塵の数に等しい波羅蜜の實踐によって一人の衆生を順次教化して、あらゆる衆生界を教化することによって一如來の力を成就することにおいて倦怠なき心の発起を（修得すること）である。

- (14) ①大正大藏經卷九 六八七頁下段 ②大正大藏經卷十 三三二頁上段 ③大正大藏經卷十 六七七頁上段 ④九五頁 ⑤では「時福城人。聞文殊師利童子。在莊嚴幢婆羅林中塔廟處。無量大眾。從其城出。來詣其所。……復有五百童子。所謂善財童子。善行童子。善戒童子。善威儀童子。善勇猛童子。善思童子。善慧童子。善眼童子。善臂童子。善光童子。如是等五百童子。來詣文殊師利童子所。頂禮其足。右遶三匝。退坐一面。」とされ、⑥では「時福城人。聞文殊師利住莊嚴幢婆羅林中塔廟處。皆從城出。來詣其所。……復有童子。名曰善財。與其眷屬五百人俱。所謂善禁童子。善戒童子。善威儀童子。善行童子。善思惟童子。善智童子。善慧童子。善眼童子。善臂童子。善光童子。如是等衆前後圍遶。來詣文殊師利童子所。到已禮足。右遶三匝。却坐一面。」とされ、⑦では「ダニヤーカーラの（福城）人々は、文殊師利法王子がこの都城にやって来て、確かにこの莊嚴幢婆羅（林）の塔廟に滞在しておられると聞いた。……またその時、スダナ（善財）という長者の子が、スヴラタ（善誓）という長者の子、スシーラ（善戒）、スヴァーチャーラ（善威儀）、スヴィクラミン（善勇猛）、ステインティン（善思）スマティ（善慧）、スプディ（善覺）スネートラ（善眼）スバーフ（善臂）スプラバ（善光）という長者の子たちを初めとする五百人の長者の子に囲まれ付き添われて、文殊師利法王子の下にやって来た。そして文殊の両足に頂礼し、彼の周りを三度右遶して、一隅に座した。」とされている。城名が⑧では「覺城」とされているのに、⑨⑩では「福城」とされている。童子の名にも異同がある。

- (15) ①大正大藏經卷九 六八八頁上段 ②大正大藏經卷十 三三二頁中段 ③大正大藏經卷十 六七七頁下段 ④九七頁
(16) ①大正大藏經卷九 六八八頁中段 ②大正大藏經卷十 三三二頁下段 ③大正大藏經卷十 六七七頁下段 ④九八頁
(17) ①大正大藏經卷九 六八八頁中段 ②大正大藏經卷十 三三二頁下段 ③大正大藏經卷十 六七八頁上段 ④九九頁
(18) ①大正大藏經卷九 六八八頁中段 ②大正大藏經卷十 三三二頁下段 ③大正大藏經卷十 六七八頁上段 ④九九頁
海音寺潮五郎はこの偈を次の詩に読み込んでいる。

あなあわれ、
三有を城とし、高慢の垣もて囲み、
諸趣を門とし、染愛の塹もてめぐらし、
愚癡の闇、その空を覆い、
三毒の火、もえさかる
中に住めるは、
惡魔を王とせる童蒙なり。

『華嚴經』と教育(二)

ああ、われ愚かさのゆえに、
惑いを起し、業を造りて、
苦しみの海に、

涯しなくさまよう。

文殊よ、善知識よ、

我をみちびき救いたまえ。

まどかなる智慧もて、

浄らけき慈悲もて。(海音寺潮五郎 前掲書三七頁)

(19) ②大正大藏經卷九 六八九頁中段 ③大正大藏經卷十 三三三頁中段 ④大正大藏經卷十 六七八頁下段 ⑤①一〇五頁

(20) ②大正大藏經卷九 六八九頁中段 ③大正大藏經卷十 三三三頁下段 ④大正大藏經卷十 六七九頁上段 ⑤①一〇五頁

海音寺潮五郎は次の詩にまとめている

卿こそ功德の藏ぞ。

我が所に來り詣でて、

廣大なる悲心を発し、

無上道を求めんとは。

生きとし生ける者

普賢菩薩のみ名を聞かば、

ひとしく普賢のごとく、

つとめはげみてさとり得べし。(海音寺潮五郎 前掲書三九頁)

(21) ②大正大藏經卷九 六八九頁下段 ③大正大藏經卷十 三三四頁上段 ④大正大藏經卷十 六七九頁中段 ⑤①一〇九頁 ⑥③では國名が勝樂、

山名が妙峯、比丘名は⑥では德雲 ⑦では吉祥雲となっている。因みに④では國名ハラマーヴァラント國、山名はスグリーヴァ山、比丘名は

メーガシュリーとなっている。

(22) ②大正大藏經卷九 六八九頁下段 ③大正大藏經卷十 三三四頁上段 ④大正大藏經卷十 六七九頁中段 ⑤①一〇九頁

(23) ②大正大藏經卷九 六八九頁下段 ③大正大藏經卷十 三三四頁上段 ④大正大藏經卷十 六七九頁下段 ⑤①一〇九頁

(24) ②大正大藏經卷九 六九〇頁上段 ③大正大藏經卷十 三三四頁中段 ④大正大藏經卷十 六七九頁下段 ⑤①一〇九頁 ⑥③の「我於解脱力、

逮得清淨方便慧眼。普照觀察一切世界。」は、⑥では「我得自在決定解力。信眼清淨。智行照曜。普眼明徹。具清淨行。慧眼遍觀一切境界。善巧方便離一切障。

清淨行。往詣十方一切國土。」

⑦では「我得自在決定解力。信眼清淨。智行照曜。普眼明徹。具清淨行。慧眼遍觀一切境界。善巧方便離一切障。以清淨身。普詣十方一切國土。」と「解脱力」が「自在決定解力。信解力。」④では「私の信解力は自在であり、信心に導く智の眼は清らかであ

る。真向から智の光明を照らして、普く（一切世界を）眺めることができ、普き境界において無礙である眼力と一切の障害を離れた巧みな觀察力とによって、普く眼の及ぶ限りの境界において清浄である。清らかな身体によって、一切諸方の（仏）国土に赴き、（一度に諸仏に）向かつて身を屈め恭敬するのに巧みであり、一切諸仏の雲のように（広大な）法をよく心にとどめ保持する陀羅尼力を具えている。ゆえに、私は一切諸方の（仏）国土におられる多数の如来を真正面から見ることができるのである。」とされており、少し踏み込んだ能力を位置づけている。

(25) ④大正大藏經卷九 六九〇頁上段 ⑤大正大藏經卷十 三三四頁中段 ⑥大正大藏經卷十 六八〇頁上段 ⑦一二二頁 ⑧⑨の「我唯知此普門光明觀察正念諸佛三昧」が⑩では「我唯得此憶念一切諸佛境界智慧清淨行門。」⑪では「我得此憶念一切諸佛平等無礙智慧普見法門」⑫では「私は、ただ一切（諸仏）の境界を顯現させ、（その）集合する様を（照らし出す）普門の光明という念仏（門）（憶念一切諸佛境界智慧光明普見法門を獲得しているだけである。」と獲得した法門に微妙な差異がある。

(26) ④大正大藏經卷九 六九〇頁中段 ⑤大正大藏經卷十 三三四頁下段 ⑥大正大藏經卷十 六八〇頁中段 ⑦一二四頁 ⑧一二四頁 ⑨一二四頁

(27) ④大正大藏經卷九 六九〇頁中段 ⑤大正大藏經卷十 三三五頁上段 ⑥大正大藏經卷十 六八〇頁下段 ⑦一二六頁 ⑧一二六頁 ⑨一二六頁

(28) ④大正大藏經卷九 六九〇頁下段 ⑤大正大藏經卷十 三三五頁上段 ⑥大正大藏經卷十 六八〇頁下段 ⑦一二七頁 ⑧一二七頁 ⑨一二七頁

(29) ④大正大藏經卷九 六九〇頁下段 ⑤大正大藏經卷十 三三五頁中段 ⑥大正大藏經卷十 六八〇頁上段 ⑦一二八頁 ⑧一二八頁 ⑨一二八頁

(30) ④大正大藏經卷九 六九一頁上段 ⑤大正大藏經卷十 三三五頁下段 ⑥大正大藏經卷十 六八一頁下段 ⑦一二〇頁 ⑧一二〇頁 ⑨一二〇頁

(31) ④大正大藏經卷九 六九一頁下段 ⑤大正大藏經卷十 三三六頁上段 ⑥大正大藏經卷十 六八二頁中段 ⑦一二三頁 ⑧⑨では「我唯知此一法門。豈能盡知菩薩諸行。」であるが、⑩では「我唯知普眼法門。如諸菩薩摩訶薩。深入一切菩薩行海。」⑪では「我唯知此普眼法門。如諸菩薩摩訶薩。深入一切菩薩行海。」⑫では「私はこの（普眼）法門を知っているだけである。どうして私に、（他の）菩薩たちの行を知り、その功德を語る事ができようか。」と⑬だけが異なる表現をとっている。

(32) ④大正大藏經卷九 六九一頁下段 ⑤大正大藏經卷十 三三六頁中段 ⑥大正大藏經卷十 六八二頁中段 ⑦一二四頁 ⑧⑨⑩では比丘名が「善住」⑪では「妙住」とされている。

(33) ④大正大藏經卷九 六九一頁下段 ⑤大正大藏經卷十 三三六頁中段 ⑥大正大藏經卷十 六八二頁中段 ⑦一二四頁 ⑧⑨では「正念善知識教。正念普眼經。思惟彼佛自在神力。受持彼佛句味法雲。修習正法入深法海。盡法源底攝取勝法。除滅癡暗了法寶洲至海岸國。」であるが、⑩では「專念善知識教。專念普眼法門。專念佛神力。專持法句雲。專入法海門。專思法差別。深入法游瀆。普入法虛空。淨治法翳障。觀察法寶處。漸次南行。至楞伽道海岸聚落」⑪では「隨順思惟善知識教。專心憶念普眼法門。專念如來神變威力。憶持微妙法句身雲。趣入無邊法門教海。觀察善友威儀方式。游泳甚深法海游瀆。普遍趣入虛空法界。淨治法眼所有翳障。拈拾善友所集法寶。如是作意。漸次南行。至楞伽道海岸聚落。」⑫では「そこで善財童子は次第に（南に下って）、ランカー島への途上（楞伽道）にあるサーガラティーラに近づいたのだが、その間彼は、①善智識（サーガラメーガ比丘）のあの教誡と彼の説いた普き眼という法門を常に心にとどめ、②如来の神變の不可思議に思いをめぐらし、③法の句や音節の雲を記憶し、④法の門の海に悟入し、⑤法式に注意を払い、⑥法の渦（游瀆）の真理に巻き込まれ、⑦法の虚空に遍満し、⑧法の輪（マンダラ）を清め、⑨方の宝の洲に思いをはせていた。」と⑩では「普眼經」であるが、⑪⑫⑬では「普眼法門」とされるなど表現上の差異がある。

- (34) ④大正大藏經卷九 六九二頁上段 ⑤大正大藏經卷十 三三六頁中段 ⑥大正大藏經卷十 六八二頁中段 ⑦一二五頁
- (35) ⑧大正大藏經卷九 六九二頁上段 ⑨大正大藏經卷十 三三六頁下段 ⑩大正大藏經卷十 六八二頁下段 ⑪一二六頁 ⑫では「我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何正向佛法專求佛法。恭敬佛法修諸佛法。長養佛法積集佛法。熏修佛法淨諸佛法。遍淨佛法至諸佛法。我聞大聖善能教授諸菩薩法。云何菩薩修習佛法。常見諸佛未曾遠離。常見菩薩同其善根。不離佛法智慧滿足。不捨大願。於一切衆生究竟其事。於一切劫修菩薩行心無疲倦。不捨佛刹。普能莊嚴一切世界。悉能知見諸佛自在。不離有爲修菩薩行。悉了如幻入一切趣。現受生死而無起滅。常聞正法未曾遠離。悉能受持諸佛法雲。不離慧光普照三世。」であるが、⑬では「我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何修行佛法。云何積集佛法。云何備具佛法。云何熏習佛法。云何增長佛法。云何總攝佛法。云何究竟佛法。云何淨治佛法。云何深淨佛法。云何通達佛法。我聞聖者。善能誘誨。唯願慈哀。爲我宣說。菩薩云何不捨見佛。常於其所。精勤修習。菩薩云何不捨菩薩。與諸菩薩。同一善根。菩薩云何不捨佛法。悉以智慧而得明證。菩薩云何不捨大願。能普普利一切衆生。菩薩云何不捨衆行。住一切劫。厭疲心無。菩薩云何不捨佛刹。普能嚴淨一切世界。菩薩云何不捨佛力。悉能知見如來自在。亦復不住。普於一切諸有趣中。猶如變化。示受生死。修菩薩行。菩薩云何不捨聞法。悉能領受諸佛受諸佛正教。菩薩云何不捨智光。普入三世智所行處。」⑭では「我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何勤求佛法。云何積集佛法。云何滿足佛法。云何熏習佛法。云何修行佛法。云何淨治佛法。云何隨順佛所行法。云何通達佛算數法。云何增長佛普遍法。云何清淨佛究竟法。云何總攝佛功德法。云何能入佛隨順法。我聞聖者。善能誘誨。唯願慈哀。爲我宣說菩薩菩薩云何恒見諸佛。聞法勤修。而不捨離。菩薩云何恒同一切菩薩善根。而不捨離。菩薩云何恒以智慧。證諸佛法。而不捨離。菩薩云何恒以大願。饒益衆生。而不捨離。菩薩云何恒修一切菩薩事業。而不捨離。菩薩云何恒住劫海。修行無厭。而不捨離。菩薩云何恒住刹海。普遍莊嚴。而不捨離。菩薩云何恒依佛力。悉能知見諸佛神變。而不捨離。菩薩云何恒於六趣。自在受生。住無住道。而不捨離。菩薩云何恒受諸佛正法雲雨。悉能憶持。而不捨離。菩薩云何恒發智光普照三世佛所行處。而不捨離。唯願慈哀。爲我開演。」⑮では「私は既に無上正等覺に向けて発心しております。しかし、私にはまだ次のことがわかっておりません。つまり、①どのようにして菩薩は仏法を求めべきなのか。②どのようにして菩薩は仏法を修得すべきなのか。③どのようにして菩薩は仏法を蓄積すべきなのか。④どのようにして菩薩は仏法に奉仕すべきなのか。⑤どのようにして菩薩は仏法を実現すべきなのか。⑥どのようにして菩薩は仏法に順応すべきなのか。⑦どのようにして菩薩は仏法を積み重ねるべきなのか。⑧どのようにして菩薩は仏法を充滿させるべきなのか。⑨どのようにして菩薩のなすべきことを悉く達成するために、菩薩は仏法を清めるべきなのか。⑩どのようにして菩薩は仏法に到達すべきなのか、以上のことを私は知りません。そして、私は聖者たるあなたが菩薩たちが守るべき教訓および教誡を与えて下さると聞きました。
- 聖者よ、私はいかにして菩薩は仏法を勤修すべきかをお教え下さい。どのようにして仏法を勤修するならば、菩薩は、①真実から離反しないために、仏にまみえること(見仏)から離れずにいられるのか、②あらゆる菩薩の善根と同一になるために、菩薩にまみえることから離れずにいられるのか、③智に通達するために、仏法から離れずにいられるのか、④あらゆる菩薩のなすべきことを達成するために、あらゆる菩薩の誓願から離れずにいられるのか、⑤あらゆる劫に亘って(衆生と)ともに住んでも倦怠することのないために、菩薩行から離れずにいられるのか、⑥あらゆる世界を清めるために、あらゆる仏国土に遍満することから離れずにいられるのか、⑦あらゆる如來の神變の不思議を知るために、仏の神變を見ることから離れずにいられるのか、⑧化現されたかの如き菩薩行においてあらゆる生存の境遇に生まれ死ぬ感覚を自己の身体で体験するため

に、有為転変の中に住むことから離れずにいられるのか、⑨あらゆる如来の法の雲を受け取るために、法を聞くことから離れずにいられるのか、⑩三世の智に通達しそれに従うために、智の光明から離れずにいられるのか」と表記されている。①で求められる「正行佛法・専求佛法・恭敬佛法・修佛法・長養佛法・積集佛法・熏修佛法・淨佛法・遍淨佛法」が①では「修行佛法・積集佛法・備具佛法・熏修佛法・增長佛法・總攝佛法・究竟佛法・淨治佛法・深淨佛法・通達佛法」となり、②では「勤求佛法・積集佛法・滿足佛法・熏修佛法・修行佛法・淨治佛法・隨順佛所行法・通達算數法・增長佛普遍法・清淨佛究竟法・總攝佛功德法・能入佛隨順法」④では「①どのようなようにして菩薩は仏法を求めるべきなのか。②どのようなようにして菩薩は仏法を修得すべきなのか。③どのようなようにして菩薩は仏法を蓄積すべきなのか。④どのようなようにして菩薩は仏法に奉仕すべきなのか。⑤どのようなようにして菩薩は仏法を実現すべきなのか。⑥どのようなようにして菩薩は仏法に順応すべきなのか。⑦どのようなようにして菩薩は仏法を積み重ねるべきなのか。⑧どのようなようにして菩薩は仏法を充滿させるべきなのか。⑨どのようなようにして菩薩のなすべきことを悉く達成するために、菩薩は仏法を清めるべきなのか。⑩どのようなようにして菩薩は仏法に通達すべきなのか」とでの佛法をめぐる認識の深まりを問題とする点に特異性を見ることができ。

(36) 篠原助市著『歐洲教育思想史』上 四〇九頁―四一一頁

(37) 竹中暉雄著『ヘルバルト主義教育学』 四七頁参照

(38) ①大正大藏經卷九 六九二頁中段 ①大正大藏經卷十 三三六頁下段 ②大正大藏經卷十 六八三頁上段 ③一二七頁 ④では「能問佛法一切智法及無師法」であるが、⑤では「求問佛法一切智法自然者法」に、⑥では「今復志求一切智法。及自覺法」に、①では「仏の諸法、一切智者性の諸法、自在者の諸法を尋ねるとは」となり、三番目の質問が、悉く異なっている。

(39) ①大正大藏經卷九 六九二頁中段 ①大正大藏經卷十 三三六頁下段 ②大正大藏經卷十 六八三頁上段 ③一二八頁 ④では「善男子。我已成就菩薩無礙解脫門。若來若去。若行若止。隨順思惟。修習觀察。即時獲得智慧光明。名究竟無礙。得此智慧光明故。知一切衆生心行。無所障礙。知一切衆生沒生。無所障礙。知一切衆生宿命。無所障礙。知一切衆生未來劫事。無所障礙。知一切衆生現在世事。無所障礙。知一切衆生語言聲種種差別。無所障礙。決一切衆生所有疑問。無所障礙。知一切衆生諸根。無所障礙。隨一切衆生應受化時。悉能往赴。無所障礙。知一切利那羅婆。牟呼栗多日夜時分。無所障礙。知三世海流轉次第。無所障礙。能以其身遍往十方一切佛刹。無所障礙。何以故。得無住無作神通力故。」⑤では「善男子。我得菩薩普遍速疾勇猛不空供養諸佛成熟衆生解脫門。常於此門。若行若止。修習思惟。或入或出。隨順觀察。即時獲得智慧光明。名普照諸法。究竟無礙。由得如是智光明故。知諸衆生種種心行。無所障礙。知諸衆生種種殺生。無所障礙。知諸衆生種種根性受法差別。無所障礙。知諸衆生應受化時悉往調伏。無所障礙。知諸時分。剎那臘縛。牟呼栗多。晝夜年劫。延促相入。無所障礙。知三世海諸法流轉相續次第。無所障礙。知諸佛刹無量差別。能以其身。遍往十方。無所障礙。何以故。以得無住無作無行神通力故。」①では「私は、善男子よ、無礙の門という菩薩の解脫（無礙解脫門）を獲得している。」

善男子よ、その無礙の門という菩薩の解脫に没頭することによって、それを成就することによって、それに隨順することによって、それを分析することによって、探求することによって、熟考することによって、眼前に現し出すことによって、無礙の究極（究竟無礙）という名の智の光明

を得たのである。それを得たがゆえに、私にはもう、①あらゆる衆生の心の動きを洞察するのに何の障礙もなく、②あらゆる衆生の生死を悉く知るのに何の障礙もなく、③過去の生存を想起する門に入るのに何の障礙もなく、④未来劫が尽きるまであらゆる世の衆生とともに住むのに何の障礙もなく、⑤現世のあらゆる衆生を現し出すのに何の障礙もなく、⑥あらゆる衆生の言葉や音声や慣用記号を完全に知るのに何の障礙もなく、⑦あらゆる衆生の疑問を断ち切るのに何の障礙もなく、⑧あらゆる衆生の機根の違いを洞察するのに何の障礙もなく、⑨成熟させ教化するためにふさわしいときにあらゆる衆生に接近するのに何の障礙もなく、⑩刹那、ラヴァ、ムフタール、夜、昼などの時間とよばれるものを洞察するのに何の障礙もなく、⑪十方の仏国土に自己の身体で遍満するのに何の障礙もない。というのも、もはや無生起に安住して（無住）、もう業の蓄積のありえないこと（無作）を修得しているからである。

私は、善男子よ、この業の蓄積がもはやありえないという神通の威力によって、この天穹を歩き、そこに立ち、あるいは座り、横になり、そして多種多様な威儀をなしえるのである。」と表記されている。①での「無礙法門」は⑥と⑦では「無礙解脱門」と、②では「菩薩普遍速疾勇猛不空供養諸佛成熟衆生解脱門」とされている。この状態への移行は「智慧光明」の獲得とされていることに注目すべきであり、この後に考察する「オウム真理教」の主張した錯乱した状況の下での不可思議な行動とは全く相容れないものであることは明瞭である。

(40) ②大正大藏經卷九 六九二頁中段 ①大正大藏經卷十 三三七頁上段 ③大正大藏經卷十 六八三頁中段 ④一二八頁

(41) 西村龍太郎著『あなたの心が壊れるとき』 一八一頁

(42) ②大正大藏經卷九 六九二頁下段 ①大正大藏經卷十 三三七頁中段 ③大正大藏經卷十 六八三頁下段 ④一三一頁 ⑤引用の最後の部分は⑥では「善男子。從此南方有國。名達里鼻茶。城名自在。其中有人。名曰彌伽。……」 ⑥では「善男子。從此南方。有一國土。名達邏比叱。其國有城。名金剛層。中有大士。名曰彌伽。……」 ⑦では「善男子よ。この南の地方に、ヴァジュラプラ（自在城）という名のドラヴィダ人の町がある。そこにメーガ（弥伽）という名のドラヴィダ人が住んでいる。……」と⑧での自在國呪樂城に住む良醫彌伽が、⑨では達里鼻茶國自在城の人彌伽とされ、⑩では達邏比叱國の金剛層城の大士彌伽と、⑪ではヴァジュラプラ（自在城）という名のドラヴィダ人の町に住むドラヴィダ人のメーガ（弥伽）とされ、⑫の良醫という規定が異質であるし、⑬⑭での國名がドラヴィダを想起させるものである特徴的である。先住のドラヴィダ人を經典に登場させていることは佛教の平等觀をしめすものといえよう。

(43) ②大正大藏經卷九 六九二頁下段 ①大正大藏經卷十 三三七頁中段 ③大正大藏經卷十 六八四頁上段 ④一三三頁

(44) ②大正大藏經卷九 六九二頁下段 ①大正大藏經卷十 三三七頁下段 ③大正大藏經卷十 六八四頁上段 ④一三三頁 ⑤善財の未知なるものとして彌伽に問うのは、⑥では「而我未知菩薩云何學菩薩行。云何修菩薩道。云何流轉於有常不忘失菩提之心。云何得平等意堅固不動。云何獲清淨心無能沮壞。云何生大悲力恒不勞疲。云何入陀羅尼普得清淨。云何發生智慧廣大光明。於一切法離諸暗障。云何具無礙解辯才之力。決了一切甚深義藏。云何得正念力。憶持持一切差別法輪。云何得淨趣力。於一切趣普演諸法。云何得智慧力。於一切法悉能決定分別其義。」であり、⑦では「而未知菩薩云何學菩薩行。云何修菩薩道。云何流轉諸趣。常不忘失菩提之心。云何心得堅固。勤求佛法。無有厭倦。云何獲得清淨謙下之心。無能壞者。云何得大悲心力。恒處生死。不憚劬勞。云何得陀羅尼力。自在攝持普門清淨。云何發生廣大智光。離諸翳障。云何得妙辯才。善巧決擇甚深法藏。云何得正念力。憶持佛一切法輪。云何得淨趣力。演一切法。普淨諸趣。云何得成菩薩普遍智力。於一切法。種種分別。悉能決定。

了眞實義。唯願慈哀。爲我宣說。」④では「私にはまだ次のことがわかっておりません。つまり菩薩は、①いかにして菩薩行を学ぶべきなのか、②いかにして菩薩行を修めるべきなのか、③いかにすれば、いかなる生存の境遇にあつても、菩薩の発菩提心が消滅しなくなるのか、④いかにすれば（菩薩の）志願は、倦怠なきことによつて堅固になるのか、⑤いかにすれば卓越した志願は、打ち砕かれることなきことによつて清められるのか、⑥いかにすれば大悲の力は、倦怠なきことによつて生じるのか、⑦いかにすれば陀羅尼の力は、普門が清められることによつて近づいてくるのか、⑧いかにすれば一切法を聞かず照らす智慧の光明は、智を覆うあらゆる暗幕を断ち切ることによつて生じるのか、⑨いかにすれば無礙の弁才（無礙解弁才）の力は、法と義と辞と弁とを極めた巧妙さでもつて音声の領域（マングラ）を円満に成就するために近づいてくるのか、⑩いかにすれば念の力は、あらゆる仏の法輪を無區別に心に保つことによつて近づいてくるのか、⑪いかにすれば了解の力は、あらゆる法の方角を了解する光明に通達することによつて清められるのか、⑫いかにすれば菩薩の三昧の力は、あらゆる法の意味の確定と分類に専念することによつて完成されるのか、以上のことを私は知りません。」と微妙に異なっている。

- (45) ②大正大藏經卷九 六九三頁上段 ⑥大正大藏經卷十 三三七頁下段 ③大正大藏經卷十 六八四頁中段 ④一三四頁 ⑤では「乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。若有能發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。則爲不斷一切佛種。則爲嚴淨一切佛刹。則爲成熟一切衆生。則爲了達一切法性。則爲悟解一切業種。則爲圓滿一切諸行。則爲不斷一切大願。則如實解離貪種性。則能明見三世差別。則令信解永得堅固。則爲一切如來所持。則爲一切諸佛憶念。則與一切菩薩平等。則爲一切賢聖讚喜。則爲一切梵王。禮覲。」

- (46) ②大正大藏經卷九 六九三頁上段 ⑥大正大藏經卷十 三三八頁上段 ③大正大藏經卷十 六八四頁下段 ④一三六頁 ⑤大正大藏經卷九 六九三頁中段 ⑥大正大藏經卷十 三三八頁上段 ③大正大藏經卷十 六八五頁上段 ④一三七頁 ④大正大藏經卷九 六九三頁下段 ⑥大正大藏經卷十 三三八頁中段 ③大正大藏經卷十 六八五頁中段 ④一四〇頁 ④大正大藏經卷九 六九三頁下段 ⑥大正大藏經卷十 三三八頁中段 ③大正大藏經卷十 六八五頁下段 ④一四一頁 ⑤大正大藏經卷九 六九四頁上段 ⑥大正大藏經卷十 三三八頁上段 ③大正大藏經卷十 六八六頁上段 ④一四二頁 ⑤大正大藏經卷九 六九四頁中段 ⑥大正大藏經卷十 三三九頁上段 ③大正大藏經卷十 六八六頁下段 ④一四四頁 ⑤大正大藏經卷九 六九四頁下段 ⑥大正大藏經卷十 三三九頁中段 ③大正大藏經卷十 六八七頁上段 ④一四七頁 ⑤大正大藏經卷九 六九五頁上段 ⑥大正大藏經卷十 三四二頁下段 ③大正大藏經卷十 六八八頁中段 ④一五二頁